

東亜同文書院記念基金会ニュース

第18号

2016年4月～2017年3月



Contents



第23回 東亜同文書院記念基金会授賞式 —02

東亜同文書院記念基金特別奨励賞・功労賞授与 —19

参列者、アーカイブズを語る—20

村上武氏の急逝を悼む—33

本間先生欽慕の会・根津山洲先生墓参・荒尾東方斎先生墓参 —36

東亜同文書院大学記念センター活動レポート —38

第23回東亜同文書院記念基金会授賞式

第23回東亜同文書院記念基金会授賞式が2017年2月1日、霞山会館にて催されました。

この顕彰事業は、東亜同文書院記念基金会によるものであり、その目的は、東亜同文書院およびその経営母体であった東亜同文会にかかわる研究や調査成果、および啓蒙的活動のうち、顕著な実績を認められた個人、団体や組織を顕彰するものです。東亜同文書院記念基金会を構成する滬友会（書院同窓会。2007年解散）、霞山会、愛知大学東亜同文書院大学記念センターからの推薦により同理事会において選出しており、1993年の第1回表彰以来、本年度で第23回目となります。

これまで、書院生の大旅行に関する研究成果や東亜同文会の資料に基づく研究、東亜同文書院や東亜同文会の出版物のデータベース化事業、東亜同文書院生や卒業生による日中交流に関するメディア報道、その他日中交流の活発な活動などの成果に対して顕彰してまいりました。

第23回となる今回は、功労賞として村上武氏が選ばれました。

〔功労賞受賞者〕

村上 武^{たけ}氏

東亜同文書院18期生で、中華学生部の教員を務められた父、村上徳太郎氏の御子息。父は、東亜同文書院の生みの親である荒尾精、近衛篤麿、根津一の三先覚（聖人）を祀った靖亜神社のご神体を帰国後もご自宅（埼玉県）に東光書院を興して祭られた。武氏は、父を継承しご神体を祀られてきた。

あわせて、荒尾精が志した中国、東アジアとの共同、および実践の精神を評価し、著書や伝記を復刻したほかそれをふまえ、評論紙「回光」を月刊にて発刊し、啓蒙活動を進め、2015年には、『日清戦勝異論』を刊行し、荒尾精を顕彰する諸活動に尽力なされた。

〔授賞式挨拶〕

川井伸一氏

（東亜同文書院記念基金会会長・愛知大学学長）

皆さま、おはようございます。愛知大学学長の川井でございます。今回、第23回の東亜同文書院記念基金会の功労賞を受賞された村上武さまに対し、まずは私からお祝い申し上げますと思います。東亜同文書院記念基金会の顕彰事業は、東亜同文書院およびその経営母体であった東亜同文会に関する研究などは調査成果、そしてその啓蒙活動等におきまして、顕著な業績を上げられたと評価された個人および組織、団体に対して、毎年、表彰しているものでございます。

記念基金会は、霞山会さま、および愛知大学の東亜同文書院大学記念センターから候補者の推薦をいただき、この基金会の理事会



において選考させていただいております。村上さまのご業績については、あとで詳しくご説明があるかと思いますが、やはり、指摘しておくべきことは、この先覚者の一人とされる荒尾精という人物について紹介し、詳しく突っ込んだ解説をされてきたという点でございます。

荒尾精は、言うまでもなく、この日中の貿易ビジネスの人材養成を目指して、当時は日清貿易研究所という、一種のビジネス学校です。それを創設されました。その後、自ら経営にもあたられました。それから、この研究所は、10年ぐらいのちの東亜同文書院の設立に多大な影響を与えているということ、は、もう周知の事実でございます。村上さまは荒尾精という人物についての詳しい紹介と、適格な、かつ突っ込んだ評論をされてこられたということは、やはり大きな業績ではないかと考えているところでございます。

それから、もう一つ加えさせていただきますと、村上さまは、東亜同文書院および荒尾精に関するいろいろな歴史的な資料を収集され、そしてそれを、ありがたくも愛知大学の東亜同文書院大学記念センターに寄贈、もしくは寄託されたということを知っております。これについても、愛知大学に対する多大なご貢献に対して厚く御礼を申し上げますとともに、これは、一つの大きな業績にもなるかと考えているところでございます。

この場を借りまして、この記念基金会の活

動について紹介をさせていただければと思っております。記念基金会は、1991年に設立されて以来、今回のようなこういう顕彰事業、表彰式を毎年やっております。それと同時に、それ以外に関しては、基金会の活動の概要を紹介する冊子を毎年発行してございます。お手元にあるのが、最新版の冊子でございますので、のちほどご覧いただければと思います。

それから、この記念基金会から、愛知大学の入学式および卒業式において、最優秀の成績を上げた学生に対して、表彰を毎年しているということがございます。入学式におきましては、入学者の中で成績最優秀の学生に対して記念基金特別奨励賞という名前で賞状および副賞を授与しています。また、卒業式におきまして、同様に、在学期間の成績が最優秀の学生に対して記念基金栄誉賞という名前の賞状を贈っております。

併せて、同時にこのときに、東亜同文書院の概要について説明のアナウンスを行っております。こういうことを通しまして、愛知大学の学生、教職員も含めて東亜同文書院に対する認識を促す機会にしているところでございます。当面は、以上のような活動を展開しているところでございます。これは、もう、皆さんすでにご承知おきのことだと思えますが、引き続き、記念基金会に対するご理解とご協力を賜ればとお願いするところでございます。

また、併せて、今年は愛知大学の創立70周年という記念すべき年度でございます。1946年11月に創立された愛知大学は、言うまでもなく、その前身としての東亜同文書院大学の多くの部分を継承していると思えます。この70周年の記念にあたりまして、愛知大学といたしまして、東亜同文書院大学から愛知大学へという、そのつながりについて検討、議論をする機会をもちまして、すでに一部はシンポジウムをやりましたけれども、さらに今後もそれを予定しておりますので、また後日、ご案内を差し上げますので、もしお時間がよろしければ、お足を運んでいただければと思っております。どうぞ、よろしくお願いいたします。最後に、改めまして、村上武さまには、謹んでお祝いを申し上げます。以上をもちまして、私の挨拶に代えさせていただきます。どうもありがとうございます。

〔功労賞祝辞〕

池田 維 氏(霞山会理事長)

皆さん、おはようございます。本日、この基金会の功労賞を村上武さんが受賞されました。心よりお祝いを申し上げます。改めて申し上げますけれども、私ども霞山会の前身・東亜同文会



が設立いたしましたのが東亜同文書院大学でございますので同校の伝統を受け継ぐ愛知大学と霞山会は、言ってみれば兄弟同士のような関係にあるといえます。東亜同文書院を語る上で外すことのできない日清貿易研究所の設立者、荒尾精という人は特別な役割を果たしてきた人であると思います。

村上さんは、特に荒尾精の研究というものを、ずっとなさってこられた方です。私ども村上さんの著作を拝読させていただき、東亜同文書院や荒尾精の活動などをよりくわしく知ることが出来ました。今、学長よりお話がありましたように、今回、村上さまがこの賞を受賞されたということは、まことに適切なことであると思われます。

私ども霞山会も、東亜同文会の創始者であります近衛篤磨という人物の歴史の意味と

功績をより多くの方々知ってもらうため、去年の12月に、京都の立命館大学におきまして関係の学者、研究者にも参加していただき「近衛篤磨とその時代」と題したシンポジウムを開催いたしました。そこでは荒尾精という人物が果たした歴史的役割についても議論いたしました。

私ども、そのシンポジウムを終えましたあと、京都において、近衛家の菩提寺である大徳寺のみならず若王子にある荒尾精の顕彰碑も訪れました。ここは荒尾精の盟友、根津一の家があり荒尾精も当地で執筆活動をおこなったというゆかりの地でもあり、荒尾精の志は東亜同文会や東亜同文書院へと受け継がれていったのではないかとその由縁に思いをめぐらせた次第です。そういうことで本日、村上さまが、この基金会の功労賞の受賞者になられたということに対し心よりお慶びを申し上げます。おめでとございました。

〔功労賞推薦の辞〕

藤田 佳久 氏

(愛知大学名誉教授)

愛知大学東亜同文書院大学

記念センターフェロー)

皆さん、おはようございます。ただいまご

紹介いただきました藤田です。村上武様のご推薦を申し上げます。私、東亜同文書院の記念センターの立ち上げ後、ずいぶん、いろいろ携わってまいりましたけれども、村上様とは、記念センター開設前からの古いお付き合いで、多くのお世話になってまいりました。本日は、そういう意味で、私の方から、推薦させていただきます。以下推薦文を読ませていただきます。よろしくお願います。

この度、第23回東亜同文書院記念基金功労受賞者に村上武氏を推薦させていただきました。村上武氏の父、徳太郎氏は、1901年、上海に開学した東亜同文書院第18期生で、書院の教員を務めておられました。在院中の1935年、これは昭和10年のこと、荒尾精、近衛篤磨、根津一の三先覚を祭る靖亜神社が書院に建立されました。戦後の引き上げ後、自ら創設された埼玉県東松山市の東光書院、東に光る書院と書きますが、ここへ、山田純三郎氏や滬友会等の手を経て受け入れられ、1955年、昭和29年以來、三先覚を祭主として祀られ、毎日の朝拝、毎年の例祭を続けてこられました。

村上武氏は、1970年、昭和45年、この祭主を父上から譲り受け、先覚の教えである「大学の道」を滬友会の皆様をはじめ、愛知大学の関係者や卒業生、そして吉田茂元総理大臣たる政官界の方々にしらしめるべく努力を重ねてこられました。そして、多くの参

拝者のご協力もいただきました。このような活動は、その過程で、三先覚が目指した靖亜の精神、つまり中国・東アジアとの協同による共存の道と実践を見据えた志を評価し、特に先覚の一人である荒尾精の著作や伝記の復刻出版を手掛けることにより、荒尾が目指した中国・東アジアとのかかわりの原点をしらしめるべく啓蒙されてこられました。

1996年、平成8年、滬友会が解散する際、靖亜神社を長年祀ってこられたことに対して、滬友会から村上武氏に感謝状が渡されています。併せてこのとき、靖亜神社のご神体は滬友会のほうへ移されておりません。

近年、日本と中国との関係が冷え、硬直化している中で、2016年、昨年、改めて荒尾精の志、すなわち日清戦争後、日本は清国から過大な賠償金を取るべきではない、もし取れば、日清間の協調が不可能になるばかりでなく、その後の東アジアに新たな不安をもたらしてしまうということから、賠償金に対する批判を王道のすすめを根幹とした、著書『日清戦勝異論』、戦勝は戦いに勝つ、異論は異なる論ですね。『日清戦勝異論』を出版され日清間のずれの原点と荒尾精の論の意義を解説されました。この出版は、評論家、保坂正康氏の目に止まり、毎日新聞に1ページ大で紹介されたほど反響がありました。

また、三先覚の精神を踏まえ、会報である「回光(えこう)」を毎年、主催者として会報、会誌として発行することで、それによる啓蒙

活動も長いこと続けられてきております。また、村上武氏は、滬友会の準会員として、これまで滬友会の活動を積極的に支えられてこられたほか、三先覚のお墓参りにも積極的に参加されてこられました。

ところで、村上武氏は靖亜神社を滬友会へ戻すとき、根津先覚の遺品を本学、愛知大学東亜同文書院大学記念センターへ寄贈していただいております。また、それより前、愛知大学の関係者の靖亜神社への参拝ということがあったのですけれど、その中で、孫文の秘書をやっておられた、山田純三郎という方の御息の山田順造氏が、手元に集った孫文関係の膨大なコレクションをもとに、孫文博物館を作ろうということと準備しておられたのですけれども、体を悪くされてできなくなりました。そこで山田順造氏から山田純三郎氏



と孫文にかかわる膨大なコレクションを愛知大学に寄贈していただけることになったのですが、そのきっかけづくりの一つにも貢献していただきました。このように、村上武氏の愛知大学、東亜同文書院記念センターへの貢献も大きなものであります。

以上、述べました論点、このたび高く評価させていただき、村上武氏を東亜同文書院記念基金会功労賞の受賞者として推薦させていただきます。

平成29年2月1日、東亜同文書院記念基金会への授賞推薦者、藤田佳久。以上です。ありがとうございます。

〔受賞挨拶〕

村上武氏

ただ今ご推薦をいただいて、「功労賞」を受賞させて頂きました村上でございます。

このたびは、本当に有難うございました。私は村上徳太郎と云う滬友の18期生の息子でございます。18期生は根津山洲院長の「大学」の講義を直接聞く事の出来た最後の学生だったのでないかと思えます。

父は非常に個性が強くて、息子としての私は、父親が作り出している空気の中から、何とか逃げ出したいと思いつつ育ちました。いろいろと逃走を図った訳ですが、それが上

手く行きませんでした。

私には兄が居りました、父の後を引き継ぐと云う覚悟をしていて、父の意に添おうと一生懸命努力していました。その兄が27歳の時、白血病で夭逝致しました。当時、私は大学を卒業して、九州・佐賀県にあった炭礦に勤めていました（父の許から離れたいと云う気持ちもありました）。その兄が死ぬ間際になつて、私の勤務先の炭礦を訪ねて来ました。羽田で飛行機に乗る前に吐いたりする体調不良もあつたようです。無理を押しての苦しみながらの最後の旅行でした。父は佐賀県出身ですから、佐賀市に実家のお墓もありまして、最後に墓参を果たしたいと云う気持ちもあつた事と思います。兄を父の実家の墓に案内したりした後、炭礦の宿舍の一室に布団を並べて寝たのですが、夜中に、窓から差し込んでいた月明かりの中で、やせ細った顔で苦し気に息をしている兄の顔を見た時に、これは私に、父の後を継いで東光書院をやつてくれ、と云う事を頼みに来たのだ、と云う思いに取りつかれて、その時の兄の顔と同時にこの思いが頭から離れなくなりました。ですから、私は今でも、父の後を継いだ、と云う気持ちよりも、兄の願いを引き継いでいる、と云う気持ちの方を強く感じています。

今、藤田先生から過分なお言葉を頂いて、功労賞にご推薦いただいたのですが、この歳になりまして私も人の名前が出て来なくなつたりすることが増えていきますので、書いて

来たものを読ませて頂きます。

今日は、私自身のこと、靖亜神社が40年間、東光書院でどのように祀られて来たか、私が荒尾精先生について何故関心を持つようになったかについて、3点についてお話させて頂きます。

昭和10年、時の同文書院院長大内暢三先生が、霞山近衛篤磨公、東方斎荒尾精先生、山洲根津一先生をご祭神とする靖亜神社を同文書院の校内に創建する事を発願されました。大内先生は長く近衛霞山公の秘書を務められたり、霞山公と関係の深い方でしたが、昭和9年2月11日の霞山公30周年の祭典を挙げるに当たつて、この靖亜の三先覚が祭典の場に臨まれていたような感慨を受けて、三先覚を祭神とする靖亜神社を創建しようと決意されたと云います。同文書院



校内に創建された靖亜神社は、戦火にあつて交通大学に疎開していたと云う事もありましたが、上海の地で祀りされていたのは敗戦までの10年間だけでありました。

戦後10年たった昭和30年（1955年4月）から埼玉県東松山市の東光書院内に遷座・再建された靖亜神社は、この地で父と私が祭主を務めて40年間祀られる事になりました。その間、靖亜神社がどのように祀り続けられて来たかは、愛知大学の今後の姿を考へる上でも大きな意味を持つていていると思います。

靖亜神社のご神体、小さなお鏡でございますが、これが、終戦時に同文書院が上海から引き揚げる時に、本間学長（院長）が山田純三郎先生に託されたのだと思われまふ。それが東京の滬友会の事務所保管されていきました。滬友会の事務所は虎ノ門の会計検査院、大蔵省の裏にありましたが、その半地下のような倉庫が滬友会の事務所になつていたのですが、そこにありました。

父村上徳太郎が経営しておりました私塾・東光書院は終戦の年の5月に空襲で焼失しており、その再興が父や塾生の方々によって図られていました。昭和29年に東光書院道場の再建のための土地が漸く確保されて、道場再建が始まるうとしていた時、滬友会の宇治田直義理事長が東光書院道場再建の話聞いて、靖亜神社をそこに遷座・再建して貰えないか、と父に持ちかけられました。そのお

話を父がお受けしたと云うのが発端でございました。

昭和29年3月、武蔵野の地に道場とはとても云えませんが、我々村上家の家族7人が肩を寄せ合いながら生活できる建物が完成して、我々家族が信州上田の疎開先から引越して来ました。兄は大学受験に失敗して浪人中でございましたが、私は高校1年を上田の疎開先で終えて、2年生からは埼玉県立川越高校へ転校する事になりました。弟たちもそれぞれ中学校と小学校へ転校しました。実生の松がびっしりと生え茂っている林と、戦時中の畑が放置された荒地の中に小さな家がぼつんと建ち、その中に家族7人が布団を敷き詰めて寝るような状況の生活が始められました。

その状況の中で、この年の12月3日に滬友会本部事務所で宇治田理事長、波多・石川両常務理事立ち合いの下で、父は靖亜神社のご神体のお鏡と山洲先生愛用のフロックコートを手交されて東光書院へ持ち帰りました。また滬友会事務所に安置されていた根津先生のブロンズ像（杖をついた立像、いま、豊橋の記念センターにあります）は兄が風呂敷に包んで背負って運びました。兄の背中には暫く青あざが残っていたのを覚えています。銅像の木製の大きな台座は私が取りに行きました。東京へは殆ど出た事も無い田舎者の高校生が、電車の空いて居そうな時間を選んで、虎ノ門から新橋駅まで台座を担いで

運び、気を使いながら山手線から東上線乗り継いで帰りました。この時、私は父の大変な叱責を受ける失敗をしてしまいました。高校生の私は武蔵嵐山駅から川越駅までの間の定期券を持つていました。当時の東上線と山手線の間の乗り継ぎには改札はありませんでした。ですから私は新橋から池袋までの国鉄の切符10円で、そのまま東上線を経て帰って来ました。池袋・川越間の運賃をキセルした事になりました。これを聞いた父は猛烈に怒って私を怒鳴りつけ、「靖亜神社のスタートに当たって因縁を悪くする」と云って翌朝早々に池袋・川越間の運賃60円を嵐山駅に支払いに行かせられました。

靖亜神社の社殿は、ちよつとした田舎の旧家には見られるような小さな叢祠ほこらでありましたが、年の暮れまでには完成していました。そして、遷座・鎮座祭は翌年（昭和30年）の4月3日と10日の2日に分かれて行われる事になりました。3日には東武東上線でストライキが行われる予定と云う事が早くから云われていた事と、天気具合が良くないらしいと云う事で、滬友会が早々に10日への延期を決めたからでありました。

3日の東上線のストライキは中止となり、天候もまずまずで、外交界の長老坪上貞二先生（元タイ国大使・吉田総理と親しく、佐賀県出身。書院34期 正さんの父）が一番乗りで参列下さったのに加えて、近衛内閣の内閣書記官長富田健治先生や中曾根康弘（後の内

閣総理大臣）先生や園田直（日中国交回復時の外務大臣）先生ほか大勢の方々が地元の人たちと共に参列下さいました。三先覚の靖亜の精神・山洲先生の大学の道の教えを日本の国家の根底に据える事を念じている村上徳太郎にとつては、満足すべき顔ぶれが揃った鎮座祭となったと思います。

10日は東上線のストライキの心配も無く天候にも恵まれて、まさに祭典日和となりました。滬友会員37名の参加があったと記録されています。滬友会の内藤熊喜会長は自家用車で来て下さいました。院主は、山洲先生の銅像を囲んだ滬友会員の方々は「式典と云うよりも一家団欒と云った空気だった」と書いています。神前における式典を終えて室内の根津先生や荒尾先生、それに十烈士のお位牌の前に座を移してからは、父にとって重要な式次第がありました。それは恩師根津山洲先生の道統を村上徳太郎が継承すると云う決意表明を先覚の霊前での宣誓、滬友同窓に対して表明することでありました。先覚の位牌堂建設を発願されて勸進元をやつてくださった浅見覚堂さんの読経につづいて、父は「大学の三綱領」を読み上げ、それに禅宗風にいちいち着語じやくごを付けて

「右大学の三綱領は治国の要諦平天下の眼目にして山洲根津が儒に究め禪に体得せしところ、我今正に一器の水を一器に移すが如く嫡々相承することを得たり。喝！」



と大語しました。父の、この禅堂の中で行われていた様な時代があった所作は、参会した滬友会の方々には、何の事やら全く理解できなかつたろうと思います。そして、後に父はこの事を文章にもしていますから、これが根津山洲先生の道統を村上徳太郎が継いだ、と云う宣言であつたと判つた時、滬友同窓の先輩やその他の方々の間に少なからぬ波風を

起こしたと思います。いや、少なからぬ波風どころではない、「大変な反発」の感情が生じたと思います。

今、息子である私が思い返し考えてみますに、父のこの様な行動は滬友会などとの関係に大きなマイナス面を残したと思います。しかし、如何なるマイナス面が予想されたとしてもこの道統継承の宣言はどうしても行つて置かなければならないものでありました。それは父がこの「大学の道」を日本の政治の根幹に据えるために、吉田茂先生や中曾根・園田と云つた若き政治家たちを説得する際の気迫がこれによつて生み出されたからであります。滬友会の先輩方と父との間の軋轢の原因の一つが、この道統継承の宣言でありましたが、もう一つの軋轢原因がありました。

昭和30年2月15日付けの「外交春秋」の「滬友通信」欄に宇治田直義理事長の「第13回滬友会総会報告書」が載っています。靖亜神社が18期生村上徳太郎の東光書院内に鎮座された事の報告などが載っていますが、宇治田理事長は「靖亜神社の新築造営に對しまして村上氏は最初から全く献身的に御努力下さいまして、今日までわれわれの主張に對し全面的に共鳴せられ、新神社の再建造営其他諸経費一切を自費でまかなつて来ておられるのであります。」と述べられながら、「しかし靖亜神社は村上君個人のものではありません。少なくともわれわれ同窓全部の守護神でありますから、その御造営経費は村上君

のご厚意如何は別と致しまして、当然われわれ同窓が共同して負担すべきものでありますから、本部役員会におきましては、滬友会に對する寄付金中より金五万円（大和信託の投資信託証券）を同神社の建設費として金三万円、永代祭祀料として金二万円として同神社に奉納寄付してはどうかと考えるのであります」と恐る恐る提議しておられます。そして更にこの総会では

「村上君は靖亜神社の名を利用し同窓より特別の寄付を要請せざるよう村上君の御諒承を取り付け置かれたし」と云う付帯決議がなされておりました。貨幣価値の違いを考慮しても、そこで討議されている金額が誠に小さなものであり、滬友会とはこんなちっぽけなものだったのか、と思われるかも知れません。しかし、戦後の混乱期、海外からの引揚者の多かつた滬友会員の方々が経済的に恵まれない状況下での滬友会再建であり、また、父の東光書院自体も道場再建のために、大方に寄付を求めて父が奔走していた時でもありませんから、付帯決議がなされたのも無理からぬものと、今の私は思っています。この宇治田理事長の報告の中に「対支諸先覚の精神を蹂躪して横奪された霞山会館をわれわれ同窓の手に取り戻し」「新しい時代に適合する東亜同文会を再興し以て東亜同文会創立の本旨と東亜同文書院興学の主旨を貫徹するよう断固邁進しなければならぬと決意する次第」とありますが、

此処では愛知大学の存在については一言も触れられておりません。当時の滬友会内の空気を知っておく事も必要ではないかと思えます。

靖亜神社が埼玉県の東光書院内に再建されるのが京都の山洲庵に伝わると、根津山洲先生晩年のお住まいだった山洲庵を護持・管理している藤居末乃さんから手紙が来て、山洲庵にある根津先生のお位牌や遺品を東光書院で引き取って貰えないかと云う内容でした。

藤居末乃さんと云う方は、根津先生夫人栄子刀自の従姉妹に当たる方で、根津先生ご夫妻に仕えて来られた方でした。山洲庵は藤居家のものになっていたのだと思います。それが都合で人手に渡さなければならぬ事情となつて、関西滬友同窓の間でも、その処置についていろいろ論議があつたようですが、当時、戦後の困窮状態にあつた同窓の方々の力ではどうにもならなかつたようです。父は京都へも何回か足を運び、藤居さんや滬友同窓などと話し合い、お位牌を預かるについては、根津先生の養子になられていた方（確か仙台にお住まいだったと思います）の所も訪ねて了解を得て、山洲庵のお位牌や遺品をお引き受けする事に致しました。

東光書院の地元の現嵐山町（旧菅谷村）千手堂の千手院住職の浅見覚堂さんと云う方が居られました。この方は、井上雅二著「**巨人荒尾精**」を読んで、荒尾先生に心酔しておら

れて、東光書院がお預かりする事になった根津家のお位牌の中に荒尾東方斎先生のものがあると聞くと、

「自分が勧進元になつてこの村から材木を集めるから、位牌堂を造りましょう」と云つて下さいました。こうして、旧菅谷村を中心とした方々からの材木寄進と、父が東光書院の関係者から寄進いただいた費用によつて、持仏堂（位牌堂）が建立され、「**大覚堂**」と名付けられました。昭和30年11月に行われた大覚堂の落成式には緒方竹虎先生や中曾根康弘先生が列席下さいました。そして、この翌年の靖亜神社の祭典に吉田茂元総理が、遠路大磯から参列下さいました。

父が「**回光**」に書いているところによると、寄進された材木は玄人筋の評価でざつと10万円。東光書院の建設費として父が集めていた資金の中から持仏堂の建設資金に回されたものがざつと27万円ばかりであつた、とあります。

落成した持仏堂（大覚堂）では早速、早朝から「**大学**」の講義が始まりました。昭和30年10月16日の早朝「**講書始めの儀**」が行われました。講ずるのは東光書院院主村上徳太郎、聴衆は母も含めた家族6人でありました。こうして始まつた大覚堂における講義は弟が自分の友人の中学生を起こして回つて、5時の板木の音を合図に靖亜神社に参拝し、大覚堂で30分位の座禅の後、お位牌に向かつての般若心経の読誦の後に、四書の素読・講義が



行われました。この日課が毎朝続けられていました。

後年、皆さんご記憶だと思いますが、当時は創価学会の折伏旋風が非常に盛んだつた頃で、社会的にも大きな問題が生じていた時代でした。当時、父が歩いていると見知らぬ小母さんから「村上さんもご入信なされたそうで、おめでとうございます。」と挨拶されて何の事だろうと怪訝に思っていたそうです。

これは私の弟の知人が創価学会の信者で、東光書院へも出入りしていました。恐らく学会の会合で、「東光書院も折伏した」とでも云っていたのだらうと思います。その男が凶に乗って来て「大覚堂にある仏像やお位牌を全部取り払って、南無妙法蓮華經の曼陀羅を掛けろ」と言い出したのです。これを聞いた父は烈火のごとく怒りまして、翌朝にはステッキを持って門の所に立って、男を待ち構えていました。この青年がやって来るとステッキを振り上げ、大声で怒鳴りつけました。

「池田大作のキツネを捨て切ってから来い。此処に土下座して、大作キツネが全部捨て切られている事が証明されなければ、この門から一歩でも入る事は罷りならん！」

と怒鳴りつけたのであります。男は土下座をせずに、ホウホウの体で逃げ帰りました。それからこの男は東光書院に近づこうとはしませんでしたし、見知らぬ小母さんが声を掛けて来るような事も無くなりました。

この様な事を私が皆さんにお話するのは、「靖亜神社を祀る」と云うことが、日々如何に緊張感をもつて行われていたか。如何に真剣勝負であったかを判って頂きたいからであります。

LT貿易事務所代表・日中経済協会常任顧問・全日空の社長でもありました、岡崎嘉平太先生は靖亜神社の例祭に数多くご参列下さった、本当に有難い理解者でありました。父の死後私が先生をお尋ねした時に、先生が

私に話して下さった言葉を、当時の私が回光に書いていたのを見つけました。昭和59年に私が日中経済協会に岡崎先生をお訪ねした時、先生は

「私は君のお父さんは氣違いだっと思ったている。私はその迫力に惹かれて靖亜神社にお参りした」

と話して下さいました。私は「この言葉を聞いて胸が震えるような感激を覚えた、村上徳太郎をこれ程までに理解して下さいている



方をこれまで知らなかったからである」と昭和60年4月号の回光に書いています。

父村上徳太郎が根津先生の「大学の道」を継承して、それを日本の国家の根本に据えたいとの思いから靖亜神社の祭祀に死に物狂いで取り組んでいる様子は、まさに岡崎先生が言って下さったように「狂」であったと思います。天逝した兄はこんな父が行く先々で軋轢を生んでいる様を理解しており、その締めくくりをどのような形にしたら良いのか、日々腐心していて、それが病気に罹った原因ではなかったかとも思っています。

昭和30年に最初に作られた檜皮葺きの祠が傷んでしまつて居りましたので、昭和46年に日本航空会長の松尾静麿先生にお願いして靖亜神社の社殿をご寄進願うことになりました。松尾建設の施工で完成した新社殿は以前のものの二回りほど大きくなったものではありましたが、まだ、上海にあった神社からするとずっと小さなものだったと思います。屋根は銅板葺きとなり、台座は大谷石を組み上げた立派な社殿となりました。47年5月にこの新社殿の落慶の式典が行われましたが、そこには日本航空と全日空の松尾・岡崎両先生が揃つてご参列下さいました。当時、全日空の飛行機事故が重なつて岡崎先生に対する「日中問題ばかりに取り組んでいるから、飛行機事故を出すのだ」と云うような非難がありました。その様な非難が当たらない事、日航も全日空も共に手を携えて航空事

業に当たっている事を世間に示す場としての靖亜神社の式典にしたいと云う、村上徳太郎の意図があったからでありました。

しかし、靖亜神社と岡崎先生のご縁は既に上海時代にありました。敗戦時の上海で本間学長（院長）が同文書院の後始末や前線から帰って来た書院生などに食事を与えるために苦心していた時、当時日銀の上海駐在だった岡崎先生が本間先生に協力して財政的に対応しておられた事が、本間先生の文章の中にあつたと思います。

靖亜神社の例祭には、緒方竹虎先生や吉田茂元総理、中曽根康弘先生や三木武夫先生、園田直先生、藤山愛一郎先生、井出一太郎先生、宇都宮徳馬先生、岡崎嘉平太先生、稲田侍従次長、松尾静麿先生、高橋幹夫警察庁長官、新井裕警察庁長官など多くの政・官・財界の方々が縁に従ってご参列下さいました。そこに、岡崎先生が言って下さったように、村上徳太郎の死に物狂い「狂」の迫力が働いて居たこともお判り頂きたいと思えます。

父・村上徳太郎は昭和52年（1977年）1月に76歳で逝去致しました。私が靖亜神社祭主の名前で祭典を行ったのはその前（昭和45年）からでしたが、本当に私自身の責任で靖亜神社の問題に取り組んだのはこの父の逝去の後になります。この時、母は脳梗塞の後遺症で殆ど寝たきりの状況でした。父は「東光書院の運営は托鉢行脚によるべし。」

と申し残していました。

無我夢中、日々の状況に対応するだけに追われているような毎日ではありませんでしたが、この年の靖亜神社の例祭は、靖亜神社の明徳祭と、父徳太郎の百ヶ日忌法要とを併せて行うと云う、神仏混交、祭事と法要の同時進行と云う出鱈目のような催しとなりました。この時の私の張りつめた気持ちには、父の忌を理由に靖亜神社の祭典を休んでしまつては、今後の活動が次々と先送りになってしまつてはならないかと云う恐れを感じていたからでありました。式典に当たつて、内閣総理大臣福田赳夫先生は「靖亜神社の例祭を祝し、故徳太郎先生の遺徳を讃え、つつしんでご冥福を祈念いたします」と電報を下さり、園田直内閣官房長官は天光光夫人を名代としてご差遣くださいました。滙友会からは白山正巳事務局長と藤岡瑛さんが参列下さり、霞山会からは近衛通隆会長からの生花一籠と祭祀料金二万円也が供えられました。

こうした私の靖亜神社護持について一歩も引かない姿勢を汲み取つて下さつた滙友会は昭和54年の滙友ニュース47号に「靖亜神社問題 常務理事会で審議決定」とあるように、種々ご配慮・検討下さつて、靖亜神社の宗教法人化なども話題となつておりました。そしてこの年の12月には田中香苗会長と私の間で「靖亜神社の祭祀についての覚書」が交わされて、祭祀の設営その他の事柄が、今まで通りに私に任せて頂ける事になりました。



た。私は父の姿勢とは異なり、先覚の精神を、靖亜神社を軸として広めようとする事は勿論ですが、靖亜神社を護持し精神を伝えるべき直系の方々の集まりである滙友会や霞山会などは積極的に親交を深めて、そのお力を借りねばならないと考えていました。ですから、積極的に私の方から滙友会その他の関係の集まりには顔を出すように致しました。毎年の例祭には東光書院の関係者や地元の方々と共に、大勢の滙友会員の方々が参列下さるようになりました。

昭和60年は神社創設50周年であると共に、この武蔵野の地に遷座されてから30周年の記念すべき年でありました。東光書院前の道路が拡幅されると云う事もありましたので、私はこの記念として、靖亜神社の祠堂の向きを変えて、直接道路から神社が望める様に西

向きにする事と致しました。日本の武蔵野の地から西に向かって線を引くと中国上海にぶつかります。そして更に線を伸ばすと戦塵止むことの無い中東の地があります。私は靖亜神社のご神威を中国のみならず異教を奉じる中東から世界人類に広げる事を願ひ意図したのであります。この時には記念誌などの刊行も考えてもおりました。道路拡幅に伴って東光書院の土地を提供したのであります。その土地代収入と大方の皆様からのご寄進で行う事を考えておりました。勿論、滬友会からもご賛同を頂き、宮田武義先輩の手になる靖亜神社の門柱や靖亜神社由来を記した看板、清水董三先輩の書による掲額のある鳥居や手水などをご寄進頂きました（その金額は36万円だったとあります）。しかし、考えていた道路拡幅に伴う土地分譲の収入は少ないものでありますし、まごまごしている間に消えてしまい、大方からのご寄付も、私の非力・活動不足のために多くが集まらず、結局負債を残すことになって、後年、弟に尻拭いをして貰うような事になっておりました。

愛知大学同窓会と靖亜神社のご縁が出来たのはこの頃でありました。記録を繰って見ますと昭和59年の例祭には多くの滬友会員のご参列を得ていますが、愛大同窓の方々のお名前はありませぬ。しかし、60年の記念例祭の準備段階で同じ東松山市に住む愛知大学同窓会埼玉支部長の小高圭治さんがご家

族で協力下さった事が記されています。私の記憶では、小高さんが靖亜神社の存在をどこかで聞かれて、愛知大学と上海同文書院の關係に思いを致して、靖亜神社を突然訪ねて下さったのでした。爾来小高さんのご家族には滬友会の阿部弘さんと共に、毎年の例祭準備のために勤勞奉仕をして下さいました。阿部さんはお出で下さる時に得意のギョウザを沢山作って持ってきて下さいましたが、小高さんの子供さんたちが阿部さんの事を「ギョウザの小父さん」と親しむようになる關係が生まれていました。この年の祭典には愛知大学同窓会東京支部の高井和伸さん、埼玉ブロック代表小高圭治さんのお名前があります。翌61年の祭典には高井和伸さんと小高圭治さんご家族の名前が参列者名簿にあります。そしてこの年、滬友会並びに霞山会代表として大石明信さんが参列下さいました。それまでは、父と滬友同期の岩井英一さんが滬友奉賛会代表と云う名前で参列下さっていました。63年の祭典には、愛知大学同窓会東京支部長の井柳学さんが一番乗りで参列下さり、小高圭治さん、杉浦威志さんも参列下さいました。そしてこの祭典には大石明信さん、井柳さん、事務局長その他の方々と共に参列下さっています。井柳さんにはご挨拶を頂きましたが、井柳さん

「愛知大学が靖亜の先覚の精神を継承する大学である事、上海同文書院の後継大学である」と云う認識を熱っぽく力を込めて主張されていた事を思い出します。以後の靖亜神社の例祭には滬友会長として大石会長、春名和雄会長が欠かさずご参列下さり、愛大同窓会からも関東支部の各ブロック長他の方々が大挙ご参列下さるようになりました。そのような空気の中から東亜同文書院大学記念センターにある多くの資料を提供された山田順造さんと愛大の大野一石先生の關係が生まれ、相互の理解で、山田家の資料の愛知大学への移管が決まりました。また、東光書院がお預かりしていた京都・山洲庵からの根津先生の資料も愛大の記念センターへ移管させて頂きました。

また、霞山会の近衛通隆先生は八海山を提げて度々ご参列下さっています。先覚烈士の靈前に座を移しての大覚堂での直会の席で、一升瓶からの茶碗酒を交わしながら、「酒は水のようにノドを通るのが良いんだ」と云うような酒談義を含めて、種々教えて頂いた事は本当に有難い事だったと思っています。

今日、愛知大学と東亜同文書院同窓の滬友会、そして霞山会の三者の關係は、同文書院記念センターも充実されて、まさに理想的な形に納まっていると思われまふ。

しかし、この三者の關係は、戦後70年の間に、決してスムーズに今日の形のようになったわけではありませんでした。当初、滬友会の先輩方は東亜同文書院の再建を自分たちの手で行いたいと思つて居られたと感じられました。そこには本間先生他の方々の方々の努力に

よる愛知大学の存在は認識されていなかった、と云うよりもむしろ無視したいと云う気持ちがあったのではないかとさえ感じられました。山田順造さんが当初「愛大はアカだ」と云って毛嫌いしておられたのは、蒋介石・国民党との親しい関係があったと云う個人的な感情でありましたが、それは別にしても、滬友会と愛大の関係が良いものではなかった、と云う空気は父と滬友同窓会の方たちとの会話・雰囲気の中で感じていました。

大石滬友会長は滬友31期の卒業です。この様に時の推移と共に滬友会内での若返りがあつて、愛知大学への認識が変わり始めたと言ふ事は当然あつたと思います。しかし、これと時を同じくして靖亜神社に於ける滬友同窓と愛知大学関東支部同窓会の皆さんとの積極的な交流が図られたと云うことも、大きな力になっていたと思います。愛大同窓会の方々が多数、靖亜神社の祭典にご参列下さるようになります、今泉先生や藤田先生などの同文書院にかかわりを持っておられた先生方に続いて、学長先生が遠路豊橋からご参列下さるようになります。私も愛大や同窓会の催しに参加するために豊橋や名古屋にも出来るだけ出席するように努めてまいりましたが、大学の学長先生がわざわざお出で下さると云う事は、そこに同窓会関東支部の方たちの強力な働きかけが実った結果であると思つて居ります。時の推移の中で、このように靖亜神社の存在に関係しての大勢の方



の努力が重ねられてきたと云う事を忘れてはならないと思つて居ります。今日ここに私が「功労賞」を頂戴したと云う事は、多くの皆様方の努力が積み重なったの上で、愛大と滬友会、そして霞山会の三位一体の関係が出来たからであると思つて居ります。靖亜神社の祭主を多年にわたって務めて来た者として、非常に有難い事と感謝しております。

平成8年4月に、靖亜神社を滬友会にお返

しする事を決意しました。滬友会が解散して東光書院へ靖亜神社を委ねて下さった本家本元が無くなつた時、私一代は兎も角、子供の代になつたら収拾が出来ない事態になつてしまふ事が目に見えていたからであります。この時、滬友会の春名会長、賀來事務局長さんは状況を素直に理解して下さい、私の意向を受け入れて下さいました。ご神体のお鏡を滬友会にお戻しすると同時に、根津先生と夫人のお位牌は根津家ご本家に、荒尾先生と10烈士のお位牌は荒尾先生の墓所である全生庵にお納め致しました。その時、根津先生関係の遺品・資料などは豊橋の愛知大学にお納め致しました。この時、石井学長に靖亜神社を愛知大学に遷座する事は出来ないかとご相談も致しましたが、それは無理だろうと云うご返事でした。

滬友会からは父と私で靖亜神社を40年間護持してきた事実を評価して下さい感謝状を出して下さいました。そして今回の「功労賞」であります。私はこの2枚の「感謝状」と「賞状」によつて、死に直面した兄から託された使命が果たせたと安堵しております。岡崎先生が「狂」と評価して下さいた父の残したものの整理を付ける事が出来たと、達成感を噛みしめております。

さて、平成27年4月に「日清戦勝賠償異論 失われた興亜の実践理念」と云う本を出版致しました。これは平成元年に出版した、荒尾先生が残された印刷物を集めて、当時のまま



の形・活字で復刻し、その解説を私が書いて作りました「東方斎荒尾精先生―遺作復刻出版」を、書肆心水の清藤洋さんが、現在の活字に打ち直して読みやすくして出版してくれたものでした。そして保阪正康先生が毎日新聞（平成27年5月9日）のオピニオン欄、「昭和史のかたち」に「**明治人・荒尾精の教え・軍事に寄らない本当の「皇道」**」と題して解説・紹介して下さいました。保阪先生は荒尾精先生の本質を的確に紹介して私の言いたいところを述べて下さっています。荒尾先生について話し始めると長くなりますから止めませんが、私は井上雅二先生の「巨人荒尾精」も復刻して、それに井上先生が荒尾先生の本質

を理解できずに誤解を招く恐れがあると思われるところを指摘・補足して出版致しました。こんな事が先覚の精神を広めたとする今日の功労賞を頂く理由の一つになっているのではないかと思います。

私は三先覚のうち、近衛霞山公については霞山会があつて種々の出版がなされている。山洲根津先生については父なども沢山書いていますし、私などが付けくわえる処は無いように思います。しかし、夭逝された荒尾先生については取り上げ方があまりにも少ないのではないかと感じていました。荒尾先生には日清戦争の時に「対清意見」「対清弁妄」の勇氣ある出版があるにも拘わらず、時の外相・陸奥宗光は「蹇蹇録」の中で、谷干城を取り上げて

「谷子爵と雖も未だ曾て社会の逆潮に抗して其公然持論を発表する迄の勇氣なく唯々これを其私書中に述べて微意を洩らすに止まれり」と書きながら、荒尾先生が勇氣・情熱を以て国民に自制を求められたことについては触れておりません。私は荒尾先生をもっと世に出す努力が必要だと痛感致しました。しかも荒尾先生は尾張藩士、愛知大学の皆さんの同郷の先輩であります。荒尾先生についての研究を深める方が愛大生の中から輩出する事を願っております。

有難うございました。長くなつてしまいましたがこれを以てお礼の言葉にさせて頂きます。しかし、此処でどうしても付け加えさ

せて頂きたい事がございます。

それは靖亜神社の神宝とされた三振りの刀の内、根津山洲先生の佩刀についてであります。これは靖亜神社創建の時に、根津家から、先生が「血塗らざる佩刀」として誇りを持っておられた刀を、感激を以て拝受した山田岳陽先生の文章が残されております。南京事件の折に16師団長の中島今朝吾が陣中見舞いに訪れた高山某剣士に中国人捕虜を7人与えて試し切りさせたと言ふ事を日記に誇らしげに書いています。しかも自分の佩刀で2人の首を切つた事を誇っています。この様な狂気の軍人が存在する日本軍の中で、「未だ血塗らざる佩刀」を誇りにされていた根津山洲先生の見識・ご性格の素晴らしさに、愛大の方々は気づいて、これを愛大精神、日中友好の根幹に据えて頂きたいと、心よりお願い申し上げます。

本当に有難うございました。



東亜同文書院記念基金会 記念賞・功労賞・奨励賞のこれまでの受賞者

第1回 平5(1993)年度 記念賞	<p>平成5(1993)年11月5日</p> <p>上海交通大学 中日科技研究会 (翁史烈(当時の上海交通大学学長)が会長)</p> <p>科学技術及び教育に関する日本の資料を中国の学生向けに刊行するなど日本事情を中国に紹介する活動を行っている。(東亜同文書院大学 45期専門部卒業生吉川信夫氏は私財を投じて同会を支援した。)</p>
記念賞	<p>谷 光隆氏 (元愛知大学教授)</p> <p>大旅行調査を研究 大運河調査報告書を刊行。</p>
記念賞	<p>菅野俊作氏(東北大学名誉教授 41期)</p> <p>中国人留学生を支援。</p>
第2回 平6(1994)年度 記念賞	<p>平成6(1994)年9月16日</p> <p>林文月氏 (台湾大学名誉教授)</p> <p>源氏物語他を中国語に翻訳刊行。</p>
記念賞	<p>栗田尚弥氏 (埼玉大学講師)</p> <p>「東亜同文書院 日中を架けんとした男たち」を刊行。</p>
記念賞	<p>白川正雄氏 (42期)</p> <p>戦後スマトラに永住し戦火で消失したモスクを再建。</p>
記念賞	<p>村上和夫氏 (長野県中国文化研究会副会長)</p> <p>中国古代瓦当文様の研究を刊行。</p>
第3回 平7(1995)年度 記念賞	<p>平成7(1995)年9月13日</p> <p>藤田佳久氏 (愛知大学教授)</p> <p>大旅行調査報告書を解説し「中国を歩く」等を 刊行。</p>
第4回 平8(1996)年度 記念賞	<p>平成8(1996)年9月6日</p> <p>ダグラス・レイノルズ氏 (ジョージア州立大学歴史学部副教授(注:肩書きは受賞当時))</p> <p>東亜同文書院の大旅行調査を研究し、それが戦後米国で発展した地域研究(Area studies)よりも古い歴史を持つ優れたものであることを検証し「地域研究の知られざる起源日本の東亜同文書院」を刊行して広く世に紹介した。</p>
記念賞	<p>陳 弘氏 (44期)</p> <p>日中要人の会談の通訳 人民日報東京特派員として友好促進に貢献。</p>
第5回 平9(1997)年度 記念賞	<p>平成9(1997)年10月7日</p> <p>遠山正瑛氏 (鳥取大学名誉教授)</p> <p>日本砂漠緑化実践協会を設立ボランティアを指導し内蒙古砂漠に植林。</p>
第6回 平10(1998)年度 研究奨励賞	<p>平成10(1998)年9月24日</p> <p>薄井由氏 (上海復旦大学修士課程)</p> <p>「東亜同文書院大旅行初歩研究」を中国で出版予定書院の業績を中国で紹介。</p>
研究奨励賞	<p>水谷尚子氏 (日本女子大博士課程)</p> <p>書院中華学生部を研究し論文「東亜同文書院に学んだ中国人」で同学生部の業績を紹介。</p>

第7回 平11(1999)年度 記念賞	平成11(1999)年9月28日 (テキ)新氏(上海復旦大学大学院修士課程修了 慶應義塾大学大学院法学研究科後期博士課程) 東亜同文化の日中近代史における足跡を研究、再評価する論文を発表。
研究奨励賞	劉永誌氏(愛知大学大学院文学研究科博士後期修士課程 博士学位取得) タクラマカン砂漠の困難な現地調査を行い、その日本語論文は辺境の地誌学的研究として高く評価された。
第8回 平12(2000)年度	平成12(2000)年9月29日 名古屋テレビ「青春の中国」取材班 東亜同文書院の「日中の架け橋を」という理想に生きた書院生の青春とそれを現代に受け継ぐ愛大学生の姿を生き生きとテレビで紹介。
第9回 平14(2002)年度	平成14(2002)年9月26日 西所正道氏 「上海東亜同文書院風雲録」を刊行。卒業生たちの足跡を追うことにより、東亜同文書院の建学の精神が世紀を越えて現代に生き続ける姿を広く世に紹介。
第10回 平15(2003)年度 記念賞	平成15(2003)年9月24日 工藤俊一氏 「北京大学超エリートたちの日本論」を刊行。各方面から高い評価を得た。
第11回 平16(2004)年度 記念賞	平成16(2004)年9月29日 今泉潤太郎氏(愛知大学名誉教授) 「愛知大学『中日大辞典』」の編纂に長年献身的に力を注ぎ、同辞典の内外における高い評価の形成に多大の寄与をした。
第12回 平17(2005)年度 記念賞	平成17(2005)年10月7日 大森和夫氏(国際交流研究所長)・弘子さん夫妻 日本語教材を中国の大学に寄贈するなど日中文化交流活動を続けた。
第13回 平18(2006)年度 記念賞	平成18(2006)年12月8日 テレビ宮崎 強制連行で過酷な労働を強いられた中国人労働者を親身にかばった勇気ある日本の青年の精神と行動力のルーツを辿るヒューマンドキュメンタリーを制作放送した。
奨励賞	成瀬さよ子氏(愛知大学豊橋図書館司書) 内外のぼうだいな資料を収集整理し貴重な「東亜同文書院関係目録」を作成刊行した。
第14回 平19(2007)年度 記念賞	平成20(2008)年1月29日 浅川義基氏 北京国際元老テニス大会に連続20年間出場する中で、会の推進的役割を果たし、日中友好と国際親善のために尽力した。

第15回 平20(2008)年度 記念賞	平成21(2009)年1月30日 工藤美代子氏 著書「われ巢鴨に出頭せず」において文麿公の行動を論理的に検証したが、これは東京裁判史観を根底から覆す程の功績があった。
第16回 平21(2009)年度 記念賞	平成22(2010)年1月27日 葉敦平氏 東亜同文書院の上海交通大学キャンパスの占用、両校の近隣同士の友好関係などを、史実に基づき組織的に研究し、「資料選集」を編集。
第17回 平22(2010)年度 記念賞	平成23年(2011)年1月26日 小坂文乃氏 著書「革命をプロデュースした日本人」で、孫文に対し多大の援助を与えながら「一切口外シテハナラズ」として革命運動の隠れた援助者であった梅屋庄吉の生涯を明らかにした。
記念賞	中日大辞典編纂所 鈴木擇郎先生らにより計画された東亜同文書院中国語教育のシンボルともいべき辞典編纂に長年取り組み中日大辞典第三版を刊行。
第18回 平23(2011)年度 功労賞	平成24年(2012)年1月24日 藤田佳久氏 オープン・リサーチ・センター事業実施。東京・中日・北陸中日新聞連載「東亜同文書院の群像」執筆。
奨励賞	武井義和氏 「孫文を支えた日本人」出版。「中国における東亜同文書院の『資料選集』」翻訳。
第19回 平24(2012)年度 奨励賞	平成25年(2013)年1月25日 保坂治朗氏 それまで東京同文書院の実態が幻的存在であったのを実像化した点で先駆的であり、当記念センターの書院研究で当初からなかなかアプローチ出来なかった空白部分を埋め、時代背景にも言及されつつ東亜同文書院のある種原点を解明された。
奨励賞	有森茂生氏 東亜同文書院関係の図書、資料文書、写真、レコードなどを2008年以来ほぼ毎年のように寄贈され、愛知大学東亜同文書院大学記念センターの展示や研究に貢献された。
第20回 平25(2013)年度 記念賞	平成26年(2014)年1月28日 岡部達味氏（東京都立大学名誉教授、元霞山会理事） 中国政治・中国外交を専門とした学術研究に加え、メディアを通じて我が国論壇としてリードする役割を果たされた。1997-2001年には日中友好21世紀委員会日本側座長を務められ、日中間の相互理解促進に大きく寄与された。

<p>功労賞</p>	<p>平井誠二氏 (公益財団法人大倉精神文化研究所研究部長)</p> <p>東亜同文書院卒 3 期生大倉 (旧姓江原) 邦彦氏が戦前設立した大倉精神文化研究所の研究員として、同研究所の研究活動を企画運営されている。東亜同文書院関係にも強い関心を持ち、多くの史資料収集を行なうとともに、機関誌『大倉山論集』に多くの研究者を動員して、その成果を集積されている。</p>
<p>第 21 回 平 26(2014)年度 記念賞</p>	<p>平成 27 年(2015)年 1 月 27 日</p> <p>北川文章氏 (霞山会顧問、霞山会元理事長、山一証券元副社長)</p> <p>日中間の文化交流事業、留学生交流事業、日中間の相互理解の推進に尽力されたことにより、中国上海交通大学及び浙江大学より顧問教授に任命されるとともに、揚州大学より名誉教授の称号を授与された。霞山会理事長就任時には愛知大学理事も兼任され、史実に基づいた「上海交通大学と財団法人霞山会の歴史関係に関する共同研究」に尽力されるなど、国際研究交流事業推進に多大な貢献をなされた。</p>
<p>功労賞</p>	<p>仁木賢司氏 (ミシガン大学上級ライブラリアン)</p> <p>東亜同文書院関係の文献資料を精力的に取集し、ミシガン大学等の研究者へその提供および指導をされ、アメリカにおける東亜同文書院研究のベースをつくられた。2009 年には「ミシガン大学の東亜同文書院およびアジア系文献史資料のデジタル化」、2014 年には「書院との出会いと史資料」と題して愛知大学で講演され、東亜同文書院大学記念センター発展への期待を力説された。</p>
<p>第 22 回 平 27(2015)年度 記念賞</p>	<p>平成 28 年(2016)年 1 月 22 日</p> <p>小崎昌業氏 (東亜同文書院大学第 42 期、愛知大学第 1 期、元在モンゴル特命全権大使、元在ルーマニア特命全権大使)</p> <p>東亜同文書院大学の第 42 期生並びに愛知大学 (旧制) の第 1 期生として、歴史的に関わりが深いこれら 2 つの大学の発展のために、一般財団法人霞山会を理事、また顧問として、同時に、学校法人愛知大学の監事も務められるなど、生涯を懸けてご尽力されてこられた。</p> <p>また、外交官としてのご活躍、東亜同文会の昭和期の諸活動の取りまとめ、愛知大学に引き継がれた現地主義教育へのご指導など、実質を伴ったご功績を残してこられた。</p>
<p>第 23 回 平 28(2016)年度 功労賞</p>	<p>平成 29 年(2017)年 2 月 1 日</p> <p>村上武 氏 (回光会・東光書院院長)</p> <p>東亜同文書院 18 期生で、中華学生部の教員を務められた父、村上徳太郎氏の御子息。父は、東亜同文書院の生みの親である荒尾精、近衛篤磨、根津一の三先覚 (聖人) を祀った靖亜神社のご神体を帰国後もご自宅 (埼玉県) に東光書院を興して祭られた。武氏は、父を継承しご神体を祀られてきた。</p> <p>あわせて、荒尾精が志した中国、東アジアとの共同、および実践の精神を評価し、著書や伝記を復刻したほかそれをふまえ、評論紙「回光」を月刊にて発刊し、啓蒙活動を進め、2015 年には、『日清戦勝異論』を刊行し、荒尾精を顕彰する諸活動に尽力なされた。</p>

東亜同文書院記念基金特別奨励賞 東亜同文書院記念基金栄誉賞 授与

東亜同文書院記念基金会では、書院への理解を深め、伝統を引き継いでいくことを期待して本学学生へ2種類の表彰をしております。1999年度より「東亜同文書院記念基金栄誉賞」を設け、学位記授与式において、人物・学業成績が優れた者を表彰しています。

また、2013年度より「東亜同文書院記念基金特別奨励賞」を設け、入学式において入学試験の成績が最も優秀な入学者に対して、同賞を贈っております。

【2016年度受賞者】

東亜同文書院記念基金 特別奨励賞

現代中国学部 杉浦 有月
すぎうら ゆづき

東亜同文書院記念基金 栄誉賞

現代中国学部 岸 里佳
きし りか



【基金役員名簿】

会長

川井 伸一

(愛知大学理事長・学長)

副会長

池田 維

(霞山会理事長)

理事

藤田 佳久

(愛知大学名誉教授)

星 博人

(霞山会常任理事)

三好 章

(愛知大学東亜同文書院大学
記念センター長)

各務 一徳

(愛知大学事務局長)

監事

岡村 幹吉

(岡村会計事務所)

参列者、 アーカイブズを語る

授賞式の後、懇親会が催され、書院卒業生や関係者の方からお言葉をいただきました。

大滝 このたび東亜同文書院記念基金功労賞ご受賞の村上武様、まことにおめでとうございませう。ご紹介いただきました大滝と申します。本間喜一先生のご生家から約300メートルのごく近隣で生まれました。私は、昨年3月末をもって、4年間務めた国立国会図書館長を退任いたしました。一昨年の正月、同窓会の関東地区四支部合同新年会の際にお話しさせていただいたり、愛知大学の皆様には、何かとご支援やご指導をいただきました。この場を借りて心から御礼申し上げます。第です。

只今、折角ご挨拶する機会を与えていただきましたので、ひとつ、ご報告申し上げたいと思います。昨年の春、館長を退任いたしました。ホッとしているところに地元から電話がありました。本間喜一先生のお父上である本間則忠の遺品があるので、見てほしいというご連絡でした。

ご承知のとおり、本間喜一先生のお父上としては、実のお父上と、養親のお父上がいらいっしやいます。養親のお父上は、実の叔父さ

んで、本間則忠という方です。私と同じ名前なのですが偶然です。この方は文部官僚で、喜一先生は11歳で、その叔父さんを頼って上京し、その後しばらくして、この叔父さんの籍に入って本間姓になり、大学まで進学されます。

本間則忠は、高文試験に合格して、都合5つの県に地方官として赴任してから、東京で仕事をしたあと、郷里に戻り、米沢市内に隠居します。そして、在郷にある実家の敷地に、3間×2間半の板倉を建てて、その2階に自分の所持品を保存していたということでもあります。そういう話は聞いたことがあったのですが、実際、何が遺されているかは分からなかったわけです。

そうしたら、昨年の春に「みかん箱1個ぐらいいはありそう」という連絡で、それで7月



に入って伺ったところ、みかん箱1個どころではなく、大量の書簡類をはじめ、遺品が保存されていることがわかりました。そこで急ぎよ、関係者にお声掛けして、8月6日に現地調査を行いました。関係者として、愛知大学東亜同文書院大学記念センターから藤田佳久先生にご参加いただき、また、本間則忠は旧制武蔵高等学校創立に中心的に関わっていますので、武蔵学園記念室から専門家にご参加いただきました。さらに地元の川西町教育長、そして遺族、現在は則忠のやしやご（孫の孫）に当たる方ですが、その方を含む8名で、猛暑の1日をかけて現地調査した次第です。

その結果、本人旧蔵の職歴関係辞令等、書簡類（封書・ハガキ・名刺等。来信のほかに発信の下書きを含む）、大礼服、書籍、柱時計、等と多彩に遺されていることがわかりました。明治後期から昭和初期まで、東京、島根、山梨、鳥取、大分、栃木に仕事で転住しましたが、各時代の書簡類が、現存しています。もちろん、本間喜一先生からの封書や葉書類も多く含まれています。結果的には段ボール箱に詰めて12箱になりました。

本間則忠は、鉄道王であった根津嘉一郎の熱意を引き出し、私立初の七年制の旧制武蔵高等学校の設立事務の一切を担当して、大正11年、江古田での開学に漕ぎ着けた武蔵学園創立の功労者です。また、その後は自ら、近くの中村橋に富士見高等女学校を開設し、初

代校長になります。この学校は山種学園に引き継がれて、現在も繁栄しています。そして、昭和3年、米沢に隠居しました。

そのような経歴ですので、遺族と相談し、現地調査の参加者全員の合意のもと、段ボール箱で12箱を武蔵学園記念室に搬入することになった次第です。昨年9月以降、武蔵学園記念室で、私もボランティアで毎週1回伺って、1箱ずつ開梱して中身のリストアップを始めます。なかなか時間がかかり、今月の初めまでの5か月でようやく1箱目が済んだ段階ですが、計1386点があります。その中に、本間喜一先生関係が少なくとも60点はございます。喜一先生自筆の書簡類54点、そのほか則忠による喜一先生宛の下書き、東京帝国大学の授業料の領収書とかも含まれています。

当面、そのようなことで、12箱全体を散逸させないで中身をリストアップする方針で整理に取り組んでおります。その後は、各学園史に関係する重要資料が含まれていますから、いずれ各学園で永く伝えてご利用いただけるような方向で、ご相談させていただくことが必要です。現状は全体の1割程度だけが済んだ段階で、今後とも関係者間で相談いただきながら、愛知大学関係は藤田先生にご相談しながら、進めさせていただきたいと思っています。

そのようにご報告申し上げて、ここで新たに発見された本間喜一先生のお手紙として

1通だけ、手短にご紹介申し上げたいと思います。大正元年8月16日付の喜一先生からの鳥取の本間則忠宛の手紙があります。先生21歳の時点です。多分、養親が縁談を持ち込んだことが窺えますが、その返答として、自分には特段の考えがないのでお任せするが、ただし、自分には常日頃から考えていたことが3つある。まず相手として本人の性格が第一、家のことは顧慮しない。小なる閨閥、小なる富を求めんよりは、我が細き腕を信頼せよ、誠にその腕細くとも自ら心行くように活動するような相手であれば人生の至極。2つ目、大学卒業後の如きは一家を立つる如き状態にない。3つ目、いずれにしても自分は頭を下げてもらうのは大嫌い、そういうことで、以上の点は十分にご留意を、と書き送った毛筆書簡も現存しております。喜一先生は大正8年に結婚されますが、自らの人生設計通りに実践されたことが窺われます。愛知大学が出版された『愛知大学を創った男たち』の中の本間喜一先生の部分のサブタイトルに「閨閥の庇護を拒んで」とありますが、まさにそのような本間先生の生き方の一端に接する思いで、私自身、書簡類を整理する大変充実した日を過ごさせていただいております。

結びになりますが、本日ご受賞された村上武様、重ねておめでとうございます。先ほどのご受章のご挨拶の中に、国立国会図書館をご利用されて解明されたこともおありだったとか、日頃から史資料、先人の足跡や事績

に最大の敬意を払い、かつ、それらの精神を受け継がれているとお聞きして、大変刺激をいただきながら、ここに参加させていただいております。以上、新たな史資料発掘の中間報告も含めて、粗辞ながらご挨拶にかえさせていただきます。本日は、本当におめでとうございます。

田辺 ありがとうございます。過去にこの記念基金会の記念賞、功労賞、奨励賞を授与なされた方に、「よろしかったら受賞式にお越しください」とのご依頼を申し上げたところ、4名の方がお越しいただきましたので、紹介させていただきます。第2回の東亜同文書院記念基金会の記念賞を受賞されまして、その当時の記念賞の内容の中に、『東亜同文書院―日中を架けんとした男たち』という本を刊行なされました。当時は埼玉大学講師、現在、國學院大学にお勤めになられております栗田尚弥先生、いらつしやいますか。一言お願いしてよろしいでしょうか。

栗田 突然でびっくりしていますが。村上先生、どうもおめでとうございます。

突然のことで何を申し上げていいかわからないですけども。今はおそらく23年前の栄誉ある賞をいただきました。そのとき、非常に恐縮していただいたわけでございますが。当時を思い返すと、私はその前に霞山会の軌跡と言いますか、その前の東亜同文会の軌跡



をまとめるという仕事をお手伝いしております。その過程で集めた資料を、自分なりにまとめてみよう、ということ、『上海東亜同文書院』という本を書かせていただきました。

まさか、賞をいただけるとは思わなかったわけでございます。というのは、二十数年前は、正直に申し上げまして、同文会とか同文書院、あるいは同文会の創設者であるところの近衛篤磨、それから、書院の院長であられた根津一院長とか、それから、荒尾精に対する評価というのは、要するに、日本帝国主義の先兵ではないかというような評価がものすごく強くあったわけです。私もその本を書いたときに、決してそのつもりはなかったのですが、「お前は、いつから日本帝国主義を擁護するようになったのだ」というようなことを、荒尾さんとか根津さんの本を読んだこと

もないような人から、そういうことを、言われたわけです。

それから、近衛公爵についてもですね、「あれは単なる外交論者だ、ナショナリストだ」というような評価が、正直、一般的でございました。ところが二十数年たってみますと、まさに隔世の感がいたしまして、今や、日中関係を考える原点というのは、そこにさかのぼらなきゃいけないのではないかと、いうような議論を、これは、実は中国大陸の若い研究者のほうからもいろいろお聞きします。そういう意味で、私は、ものすごい、二十何年間に、この日中関係史の研究といいますが、客観的にものを見ようという傾向が世界的に高まったということ、非常にいいことだと思います。私のゼミの学生でも、実は、来年あたり荒尾をやってみたいという人がいますので、ぜひ、皆さまに、女性なのですが、彼女にいろいろなコメントを加えていただきたいと思えます。本日は、本当におめでとうございます。

田辺 ありがとうございます。続きましては、第3回の記念賞と第18回の功労賞を授与されたのが、愛知大学名誉教授、藤田先生ですけれども、先生に関しては、また後ほどにさせていただきます。第19回の奨励賞は有森さん。有森さんも後ほどお話しただけです。大倉精神文化研究所部長の平井誠二さん。一

言をお願いします。

平井 平井と申します。村上さん、本日はおめでとうございます。先ほどスピーチされた栗田先生にいろいろ研究いただいて、うちの研究紀要に論文をご執筆いただいたり、ご講演いただいたり、いろいろお世話様になっております。私、大倉精神文化研究所ということ、横浜市の港北区にございますけれども、東亜同文書院の3期生で大倉邦彦というのがあります、その大倉が創設した研究所でございます。

そこでやっている本部としての活動を評価していただいたということで、研究所の関係者一同、とても喜んで受賞をさせていただきました。その代表ということで私が出させていただきます。というふうに考えております。栗田先生はじめ、ここにおられる多くの先生方、藤田先生はじめ皆さまにご協力いただいた、その成果かと思えます。今、実業家も社会貢献ということで、昨年から活動しております。実業家の社会貢献ということで活動、事業を始めたのは、創設者の大倉が東亜同文書院で3期生ということで、まだ書院が創立ばかりの時に入学して、ビジネススマンとしての基礎を学んで実業界に巣立って、そこで成功することができたということが前提にあり、単に金儲けをするだけではなくて、その事業で儲けたお金、自分の収入をいかに有効に使っていくかということを考えて研究所

をつくり、図書館をつくり、いろんな教育活動ですとか教育支援ですとか、そういったことをしてきました。

それは、一人、大倉だけではなくて、東亜同文書院の卒業生でビジネススマンになって広く世界で活躍した人が大勢いて、そういう人たちは、たぶん、根津精神を学び、いろんな、お金を持てるだけではない活動、国と国との友好であるとか、社会の繁栄であるとか、人々の幸福のために事業を展開するということとで学んだことを実践した成果だろうと、思つて、その一人が、たまたま大倉であり、自分はそれにかかわつたというふうに思つて、それで昨年、そういうことで活動をさせていただいて研究とか講演会とかさせていたしております。

先日も、東亜同文書院大学記念センターで、東亜同文書院の卒業生にかかわるシンポジウムがあつて、たまたま自分は仕事で行けませんでしたけども、資料を送つていただいたりして勉強させていただいています。そういう、ただ金を儲けるだけではない、社会のために何ができるかということを書院で学び、愛知大学で学び、それを実践されてきた先輩のビジネススマンの方々の活動、それをたぶんものすごく有名な方はともかく、多くの方の活動は、埋もれているのかな、と。

あまり知られていないこと、いっぱいあるのだろうと思うのですが、それを検証して、そこからさらに、われわれが、あるいはもつ



と若い人たちが学んでいける、東亜同文書院で学ばなくても、愛知大学で学ばなくても、その精神は勉強していけるんじゃないか、そんな思いがあつて、活動をさせていたいただいて、今日、ここに来させていたいただいて、改めてそういう活動を自分がさせてもらつていて良かったな、というふうに思つております。今日は参加させていただいて、どうもありがとうございます。また、先生、おめでとうございます。

田辺 ありがとうございます。本日、愛知大学の上層部の面々が参加させていただいているのですが、このあと、打ち合わせが入っているものですから、紹介だけさせていただきます席を外させていただきます。東亜同文書院記

念基金会会長である川井学長でございます。それから、副学長です。経営担当の富増副学長です。それから、副学長、教学担当の田本副学長です。そして、愛知大学常任監事の林監事です。そして、事務局長、各務でございます。総務・企画部長の鈴木でございます。

田辺 続きまして、この会を取り仕切っておりますメンバーを紹介させていただきます。基金会会長が、愛知大学の学長であります川井学長でございます。副会長を先ほどご祝辞をいただきました池田霞山会理事長でございます。そして理事としまして、霞山会常任理事であります星様。そして、同じく理事であります愛知大学名誉教授であります藤田先生。そして、東亜同文書院大学記念センター長三好先生、各務事務局長でございます。監事をお願いいたしております岡村先生。

それから、ご尽力いただいております霞山会の皆さまを紹介させていただきます。霞山会理事で研究主幹の阿部さま、参事の倉持さま、文化事業部課長補佐の研究員であられます堀田さま。

それでは、ここからは、諸先輩方がいらつしやいますので、中島寛司先輩にマイクを渡させていただきます。よろしくお願ひします。

中島 中島でございます。変わり映えのしないのが出てきて申し訳ありません。先ほどから、おいしいビールを2、3杯いただいで、

皆さんの顔が二重、三重に見えます。それは、今日、限られた時間のなかで、歓談なり懇談をしていただいて、1901年にできた同文書院が、先ほど村上さんのお話のように、いろんな関係を含めて現在に至っているわけです。同文書院の同窓会の名称を滬友会（こゆうかい）と言いますが、滬（こ）というのは、上海の古称からきています。

その靖亜神社でもって、同文書院の皆さんが参拝、継承していただいて、それが元でもって、霞山会、同文書院の関係が深まり、少したつてから愛知大学がそれに参加し、それから間もなく寮歌祭参加が叶い、それから、今も続く滬友ゴルフ会というのが続いているわけです。両者の、三者の関係が非常に深まっております。そういう環境の中で、現在の世界を凌駕したときに、霞山会、それから愛知大学のなせるいろいろなことが大事に思っています。現在を見て将来を、愛知大学と同文書院の継承をみながら愛知大学の現状を皆で語り合いたいと思えますので、よろしくお願いをしたいと思います。

今日は、皆さん、時間は2時か少し過ぎまで、こちらの会場がお借りいただけけるようです。それから、ゆつくりしたいと思えます。それで、先ほど紹介を、あとの名簿を見ていただくのと、霞山会の方まで紹介がありました。あと、書院のほうの準会員として、村上さんが先ほど紹介されました。村上さん、改めてよろしくお願います。それから、阿部さんの奥さ

んがお見えです。よろしくお願います。

阿部さんは、世界一周、自転車で回るとか非常にお元気な方でした。それから、44期の関谷さん。今日は、関谷さん、お一人であつと寂しいんですけど、またあとからご一緒に寮歌を歌いたいと思っております。それから、東京支部の杉浦さん。それから静岡の方から来てくれた荒尾さん。

埼玉の小高さん。小高さんは非常に高潔にして、精神的に非常に充実した生活をなさっているようです。それから千葉の中山さんはお休み。神奈川の奥村さん。愛知大学同窓会の副会長でもあり、第一ブロック長でもあり千葉支部の村尾さん。埼玉支部長の中川さん。それから千葉支部の金森さん。東京事務所の前の所長さんでした。東京支部長の淀野さん。それから、先ほどご紹介ありました岡山支部の有森さん。東京霞が関オフィス（ア）の夏目さん。それから、山口さん。受付の所に冊子を置いてあるように絵の大家ですからよろしくお願います。

それから紹介するまでもないけれども、会田校友課長。この会をずっと取り仕切っています。田辺豊橋研究支援課長。同じセンターの森さん。実務的なことを全部やっています。よろしくお願います。森さんがいないと、このセンターの事務は成り立たないと聞いております。よろしくお願います。それから、センターの元ポスト・ドクターの江暉さん。よろしくお願います。あとから現況な



ど聞かせてください。それでは、皆さんの紹介が終わりましたけど、あと順不同に、下打ち合わせもなく申し訳ありませんが、皆さんの方から、お話をお願したいと思います。霞山会の阿部さん、お願います。

阿部 霞山会の阿部でございます。この会は、いつもこの時期、表彰式がございますので、いつも楽しみにして参加させていたただいております。先ほど、愛知大学の学長先生のお話の中で、愛知大学が創立70周年を迎えられるというお話がございました。霞山会も、戦後、東亜同文会がなくなつたあと、霞山クラブとして再スタートを切つたのが1948年でございます。来年が霞山会70周年になります。70周年に向けて、いったいどういふことをやるべきかということ、これから理事長と相談して決めていかなければいけま



せん。やはり、理事長の今日のご挨拶の中にもございましたけれども、昨年末に京都の立命館にて近衛篤麿を中心とした明治期のアジア主義をテーマにしたシンポジウムを行いました。そういった流れを踏まえまして、来年もぜひ、愛知大学と、もしできればの話でございますけれども、協力して何かシンポジウムのようなものが開催できたら嬉しいと思っております。そういうことを含めまして、愛知大学とますます緊密な協力関係を築いていけたらと思っております。どうもありがとうございました。

中島 今のごあいさつのように、霞山会の今の活動というのが、愛知大学との深いかかわりを持ってあります。それで霞山会の活動としては、『東亜』という月刊誌が出ています。これを見ておれば、大学の博士号は簡単に取

れるというようなお話を聞いております、非常に高度な論考がたくさん載っています。それから、季刊だと思いますが、『Think Asia』というユニークな冊子が刊行されています。そこらあたりから、私どもとしては、霞山会からいろんなものを多く学んでおります。今後ともよろしく願います。

いまお話がありましたように、近衛篤麿公について何かシンポジウムができればとのこと、このあたりは、ひとつ、三好先生、藤田先生にぜひとも、よろしく願いたいと思います。ありがとうございます。

山口さん、愛知大学公館の話を一言お願いします。

山口 元愛知大学職員の山口恵里子です。今回お招きいただきました、ありがとうございます。村上様、本当に、受賞おめでとうございます。私は、在職中の10年ほど、東亜同文書院大学記念センターとこの東亜同文書院記念基金会の仕事をさせていただきました。この仕事を通して、沢山のことを勉強させていただきました。その一つが、東亜同文書院大学から愛知大学への歴史を学んだことです。愛知大学豊橋キャンパス近くにある旧陸軍第15師団師団長官舎、戦後は学長・教職員 の宿舎として利用されていた公館とのめぐり逢いです。私は、この百年の館・公館に魅せられ、四季折々の公館を描いてきました。そして、豊橋市内はもとより、東京都美術館、

愛知県美術館等で発表しています。退職した昨年には、豊橋市美術博物館で「愛知大学公館を描く」をテーマに個展を開くことができ、沢山の方に観ていただきました。個展を開催するにあたっては、藤田先生に強く推していただき、また、期間中には、展示会場内で「描かれた公館が語る豊橋物語」と題してのご講演をいただきました。6日間の期間中には、2千名近くの方が美術博物館にお越しいただき、多くの方に公館を知っていただく機会となりました。現在も公館をテーマに描き、一水会公募展に挑戦しています。愛知大学を応援していただくと共に、是非、公館も応援していただきまして、公館の再活用ができるようにバックアップしていただければと思います。描き続けていきたいと思っております。どうぞ、これからもご支援の程、よろしく願っています。



中島 山口さん、毎年、秋に上野でもって展覧会をなされますからね。先程村上さんからお話が出ましたけども、39期の阿部さんの奥さんが見えているので、思い出話をお願いしたいと思います。

阿部(妻) こんにちは。村上先生、今日はおめでとうございます。今日の受賞された村上先生とは、主人が4年ぐらい前の2013年3月に亡くなりまして、お話を伺ったら、本当に当時のことをたくさん思い出して、私としても興味深く、また、思い出しながら嬉しく聞かせていただきました。愛知大学へ村上先生と私と二人で車でね。

村上 ええ、荷物を運びました。

阿部(妻) 荷物をセンターの方に運びました。村上先生のちよつと乱暴な運転がとても怖かったのを覚えていましたけども(笑)。交代で運転してまいりまして、行ったことを今日はとても思い出しました。それから、山田順造さんのお家にあつたたくさん資料(孫文ほか)を、やっぱり村上先生と一緒に、主人がすごく相談しながら梱包したりしたのを、私は、よく順造さんのお宅に主人を送って行きましたもので、そういうようなことを思い出しながら、今日は、大変興味深く懐かしくお話を拝聴できました。ありがとうございます。



ございました。生きておれば、97歳でございますので、ちよつと私と年が違うもので。ほとんど、同級生とか、周りにも、友人、知人というのは殆どお亡くなりになつてしまつておりませんもので、厚かましいのですけど、この会に出させていただけると、なんとなく主人の思い出を思い出させてくれるというか、においを嗅げるみたいなどころがあります。最初に中島寛司さんから「おいでなさい」と言われたときに伺つて、とても感激したので覚えております。そういうわけで、厚かましいのですが、楽しみに、主人の思い出に浸る為ここに伺うみたいなどころがございますけど、今日は、本当にありがとうございます。

中島 阿部さん、あの頃苦労したものですから、その幸せを今かみしめております。よろ

しくお願いします。ありがとうございます。でも、今の山田順造さんの愛知大学への資料が移るということについても、いろいろ伺うと紆余曲折があつたみたいです。ご自分でもつて記念館を作りたいということがあつて、いろいろと体調のこともあつたりして、結果的には愛知大学に行つたということ。結果的には良かったのではないかと思いますけども、途中に、何回か、私、3回ぐらい順造さんにお会いしています。

そのときには、愛知大学へ、移すことが非常に未練があるように感じました。そこらあたりは、それは別として、今、ああいうふうには愛知大学で活かされているということの結果的には良かったのではないかと思います。そういった面を全部取り仕切つているのは今の記念センター長の三好先生です。現状だとか将来についての抱負みたいなことを、ぜひ一言、お願いしたいと思います。

三好 ご紹介いただきました三好でございます。現在、同文書院記念センター第3代のセンター長をおおせつかつております。初代のセンター長は、ご承知のようにそちらにお座りの藤田能久先生でした。藤田先生が、同文書院大学記念センターのすべてを始められたと言つても過言ではありません。その頃は、東亜同文書院に対する社会的な評価は、ここにいらつしやる先輩方には大変礼を失するようない方になつてしましますが、マ

イナス方向が大半であったと思います。それを、藤田先生のご尽力の結果、ニュートラルな位置まで戻ったのではないのでしょうか。つまり、東亜同文書院とはイデオロギー団体ではない、ましてや右翼的イデオロギー団体ではないというところまでの認識は共有されるようになったのではないか、と思います。

さて、本日授賞なさいました村上武先生、本来最初に申し上げなければならぬことでしたが、本当におめでとうございます。いや、お祝いの気持ち以上に、感謝の念が先に立ちます。神田すずらん通りに東方書店という中国関連書籍専門書店がございます。そこで、本書『日清戦争賠償異論』（書肆心水）を見かけました。チラッと見て、おや、これは何だ。タイトルからしてちよつと変った、一般的ではないタイトルではありませんか。しかも、帯には「日本の近代化がそこから道を誤った 興亜主義と侵略主義の分岐点を問う」とあります。日清戦争の戦後処理をめぐって東亜同文書院とは切っても切れない荒尾精の話ではありませんか。荒尾精という人物がやったことについては、いろいろ誤解が先に立っていることが多いと思います。その一つが荒尾のアジア主義についての理解ではなかったのか、と思います。ご異論をお持ちの方もいらつしやるかと思いますが、私はアジア主義自体には様々な要素を含み込まれており、アモルフアスな思想であって、確固とした体系があるわけではないと思いま

す。従って、アジア主義の旗を掲げて大失敗した歴史と、アジア主義の中に胚胎する連帯の意識、悩みや困難を共有する意識を再発見することは、近代日本を見直す上で不可欠なことだと思えます。また、それだけに止まらず、現在のように大国化する中国に対して日本がどのようなスタンスで対すべきか、欧米・ロシアを含めた視点で見るとき、どのような視角を選択すべきかなど、本当の意味での共存共栄を志向するには100年前の時代に戻ることの重要性は増すばかりではないかと思えます。その意味で、村上先生の仕事は荒尾精に対する単なる再評価を越えて、近代日本史、近代日中関係史を再定置する上で重要な業績となったと思います。

現在、私が編集解説を担当し、記念センターもかわりまして、『根岸侷著作集』全五巻を不二出版から刊行しています。根岸侷は、東亜同文書院開設時の教授として、まだ20代の若さで上海の同文書院に奉職し、日本を含め諸外国には不案内であった中国の商慣習の研究から始め、学生の卒業旅行の組織化、その成果のとりまとめ、『支那省別全誌』などの重要な刊行物すべてに関わった人物です。書院を退かれてからは現在の一橋大学で戦後まで後進の指導と研究にあたられ、90歳を過ぎても卒業生がしばしば自宅を訪れたといえます。その根岸侷が中国に関わるきっかけとなったのが、和歌山にいた旧制中学生の時、日中経済提携の必要と困難さ、解決が緊

急を要することなどを説く荒尾精の話聞いたこととです。演説会に行つて「これは大変なことだ」と、「私もやらねばならない」といいただきます。その後、すぐに上海に行けたではありません。しかし、東京で基礎的な勉強を終えたあと上海に行つて、今度は根津一の話聞いてさらに感激して、中国にのめり込んでいったというわけです。そして、『支那ギルドの研究』など不朽の研究を残されました。

そういった先人たちの動きを見ていきますと、アジアをどのような見方なのか、必死に対象と格闘していることがわかります。そのときの課題は、日本がいかにしてアジアの支配者になるのかというようにつまらない話ではありません。自分が属するアジア諸国、アジアの人々といかに手を取り合っていくのか、ということとです。言いかえれば、自分



を含め、アジアの国と人々が対等な関係を構築するにはどうしたらよいか、という問題ではないでしょうか。しかも、そこで大切なことは、主体的に対応するには相手に対して言うべきことはいかに言うかという姿勢だと思えます。先ほど、村上先生がお話しされたことではありますが、相手が誰であろうと本当の友人だったら言うべきことは言わなければなりません。また、真剣な忠告に耳を傾けないのは友人ではない、というスタンスがやはり必要なのだろうと思えます。

そういうことを念頭におきながら、藤田先生がニュートラルな位置に戻してください。た東亜同文書院を、アモルファスなアジア主義にひそむプラス要因を正當に評価することによって、今度は全体をプラスにもっていきたいと考えております。愛知大学創立70周年記念事業の一環として、大学記念館、つまり愛知大学東亜同文書院大学記念センターの建物には、内装外装ともに改修工事、耐震工事を施され、以前よりずっと奇麗になりました。ですから、ぜひ豊橋へお運び下さい。

また、建物内に関しまして、数多くある所蔵品をみな様のお目にかけるよう、展示方法などにも工夫を凝らし、新しい発見ができるようにしていきたいと思っております。多くの諸先輩には、まだまだお教を乞うことも多いかと思えます。

こんごとも、ご支援のほど、よろしくお願いたします。



中島 ありがとうございます。

言いたいことを言って聞かない相手は、ほんとの友じゃないと言われましたけれども、なかなか言いたいこと言って真つすぐ通るってことは現在じゃ難しいですね。外国の場合じゃあ、アメリカのトランプさんに言ったらどうだ、習近平さんに言ったらどうだ、これは、なかなか難しいところですよ。そのあたり、皆さんと共に考えたいところです。

ちよつと今見たら、美味しいご馳走が残っているんですね。5分間、食べる時間にしますので、よろしくお願いたします。

中島 それでは、皆さんに、お話をさせていただきます。順不同です。前の埼玉支部長の小高さんです。一言、よろしくお願いたします。

小高 小高と申します。初めて話すのですけれども。滬友の記事を見ましたら、靖亜神社祭礼って書いてありまして、見ましたら東松山って書いてあるので、なんだ、おれが住んでいるところじゃねえか。それでさつそく、村上さんのところへ行ってお話ししたので、「愛大だ」って言ったら「知らねえ」ってことを言われたようですけど。

説明して「祭礼に参加させて欲しい」ということをお願したら、快く許可していただきました。だから、1年目は、愛大では確か私一人参加しました。それで翌年から、同期であります政治家の井柳がいますので彼が駆けつけまして、2回目からは彼と一緒に出て、政治家ですからバンバンとしゃべりまして、だいぶ愛大のことを分かっていたのだと思います。そのあと高井弁護士だとか、各支部長、東京、神奈川、千葉、埼玉、の支部長が参加するようになり、結構にぎやかにやっております。大覚堂でもいい気持ちで酔っ払ったりもしたけども。

私が最初に靖亜神社に行つて思ったことは、愛大とは格が違う、と。滬友会と全然違うというのを骨身にしてみたというか、分かりまして、これは口きいちゃまずいな、と。馬鹿だつて聞かなくや、口きかなくや分らないものだ、つて何かに書いてありましたので、これ、しゃべつちやいかんと思つていましたけど。ほんとに残念ながら我々と全然違う人たちの集団だったと感して。それだけは、

本当に尊敬した気持ちを持っていました。

今日おいでの、阿部さんのご主人は、ほんとに叱咤激励をされまして、酔っ払ったりしてちよつとしやべりすぎたりしますと、後ろのほうまで来まして、肩をトントンと叩いて、小さい声で「お前、それやめとけ」とか(笑)。絶対、人のところに分からないような小さい声で、でも確実にバチツと言われまして、それが何回かありましたけど。阿部さんって、そういう方なのです。本当に、阿部さんは、非常に頭のいい、しつかりしていて、尊敬できるお方だったと思います。阿部さんは、年に1回は必ず見えるので、その時には村上さんが「阿部さん来たぞ」というと、すぐ、私も出かけたものです。

広い庭ですから、掃除するのだから厄介で大変だなと、初めは思いました。でも、回数やっているうちにコツというのを覚えて、適当に抜くところは抜いてできるようになりました。そこでも村上さん、他の方にも話していたように、山田順造さんも、「愛大は大嫌いだ」って言っていましたけども、「お前みたいなやつも愛大にはいるのだな」と、ちよつと評価していただきました。

それで靖亜神社が終わりまして、ご本体は愛大へ、ところが、器とか神社をどうしたらいいかということで、神社の方に聞きましたら、完全焼却、と。「完全に燃やしてください」と言われて、それで村上さんと2人で社殿を燃やしました。村上さんは、やっぱり

寂しくなったのか途中でいなくなりましたけども、これは私の最後の務めと思つて最後まで奇麗になくなるまで燃やしました。そんなこともありましたけれども、何しろ偉大な先輩たちに囲まれての祭典は、非常に勉強になりました。人間変わったのではないかと、そんなふうにも思っております。さつき中島さんが言われましたが、心臓病をやつて、それから前立腺の手術をやつて、2つ大きいのをやりましたら、やっぱり人間変わりました。

はつきり言つて、滬友会に入りたいよりも、お経をあげるほうへ一生懸命になりました。今は、毎朝50分、経本を唱えています。その中の10分ぐらいは、私の尊敬するお釈迦さんの語録です。お釈迦さんはそれを唱えていますけれど、やはり人間、変われば変わるものだな、と、自分でそう思っています。でもこれも、滬友会の方々のお付き合い、それと愛大の仲間の付き合い、これによって私はできたのではないかな、と。本当に感謝の気持ちで、もうあと、そう長くないでしょう、そういうふうにも思っております。いろいろ、ありがとうございます。

中島 やっぱり、いろいろな人とのお付き合いによつて自分が変わっていくという、その成長ぶりを見せていただきました。ありがとうございます。

あと何人かいると思いますけども。今日は、紅三点が3人おいでしたね。それでは江さん

お願いします。

江 すみません、とても恐縮ですが。江暉と申します。東亜同文書院大学記念センターの元ポスト・ドクターでした。私と霞山会のご縁は、本当は10年前、2005年に遡ることが出来ます。そのとき、中国の大学を卒業して日本に留学しましたが、最初は、霞山会の東亜学院の日本語学校に入りました。そこで日本語を勉強して、そのあと、大学院に進学できました。進学したあと、同時に、東亜学院の中国語学校で中国語を教えるはじめました。それは一昨年の2015年まで続けまして、8年間やつておりました。

辞めた理由は、そのときに、愛知大学の東亜同文書院大学記念センターに入りました。しばらく働きましたが、ちよつと事情があり、本当に申し訳ないのですが、去年、退職いたしました。今は就職活動をやっております。



これからどこに行くのか分かりませんが、この霞山会とのご縁を一生のものとして大切にしたいと思っております。ありがとうございます。

中島 今、就活中ということで頑張っているようですが、皆さん、いろんなご縁があったら応援してやってください。よろしくお願いします。

それでは、時間も、だいぶ過ぎ皆さんのお話も一段落したと思いますので、書院の院歌や愛大の寮歌などを歌っていただいて、中締めにしたいと思います。

この会場は、3時近くまでは結構ですと言われていますので、寮歌が終わってお開きになっても、ここでもって、いろいろな歓談をさせていただきたいと思います。今、歌詞をお配りします。ご一緒をお願いします。それでは、関谷さん、お任せします。それでは皆さん、立ってもいいし座ってもいいし、……やっぱり気分が出るから、ステージに上がるってことですね。

関谷 それでは、院歌を斉唱したいと思えます。院歌は、1番と2番4番を歌います。それでは始めます。イー、アル、サン。

【皆で歌う】
中島 それでは、愛知大学の逍遙歌をお願いします。できますか。



愛知大学逍遙歌を歌います。1番2番6番！ イー、アル、サン。

【皆で歌う】
中島 ありがとうございます。それでは、歌の方はこれまでにします。

田辺 先ほど、愛大の元職員でありました山口さんから紹介されましたが、陸軍15師団の司令部が、今、愛知大学記念館になっていま

す。陸軍のトップの方が住んでみえたところで、かつ愛知大学になってから学長ほかの先生が住んでみえた建物を、愛大公館と申しております。その建物が、今年、103年を迎えています。

ここ三十数年間、使われず、公開もしてなかったところですが、3年前のちょうど築100年に、思い切って皆さんにお見せしたらどうか、と公開しました。築100年の建物で、手もほとんど入れていないものですから、床が抜けそうなどころ等々あったり、汚いところもあつたのですけれども、表面上だけ綺麗にしまして、公開したのです。これが3年前なのです。そうしましたら、2日間で1000人ぐらい集まり、評判が良く、皆さん、また見たいということからその翌年、藤田先生と私のほうで『愛大公館100年物語』という本を出版しました。そうしましたら、豊橋にある精文館書店本店にて出版記念講演会をやってほしいと、逆に先方からのオファーがありました。先生とともにお話をさせていただきました。実は、その話の前に、先ほどの山口さんの絵の話になります。

山口さんが、私どもの大学で勤務なされながら、公館にかなり意識をなされていらつしやいました。画家としての腕がすごいものですから、いろんなところに出品なされたのです。そして賞をもらいながら、愛大公館を広げて、新聞記者の目にとまり、記事となり、そして築100年になって公開となる。その

スパイラル、うまい具合に巡り合ひまして、ここ何年間、かなりファンが増えてきたというところでございます。

昨年10月に、記念センターだけでなく総務課としても、豊橋の重要文化財になっていくものから、豊橋市とタイアップして何かいい方向にもっていけないかということ、ここ2年間話し合いが続けられ、「もっと皆さんの声を聞きたいね」という話が出たそうです。ならば、3日間ぐらい公開しよう、ということ、昨年もう一度、公開しました。10月の半ばに、3日間公開したのですが、11000人の方が集まりました。前回2日間で10000人ですから、5日間だけで2000人以上の方がいらっしやったことになりました。



今日もビデオ録画をさせてもらっています。皆さんが語られているお話が30年後、50年後、もっと100年後、すごい歴史を残すことになるのではないかと思います。皆さんのお話されたことを文章にして、基金会ニュース等々に残させていただいております。ここで、愛大公館のビデオを観て頂きたいです。私がこうやって歩きながら撮ったビデオで、2回しか止めていません。二回撮りて5分間ぐらい撮った内容です。今からご覧になってください。

これは愛大から歩いて15分程の所にあります。ここは、本間名誉学長と殿岡晟子さんが間仕切りをして衝立てで境をして住んでおられたお部屋です。今映している手前のほうです。右のほうは、玄関の先入ってきたところ。上のほうはこの部屋が和室で、大広間になっています。奥のほうには、ああいう飾りが日本風にできていまして、ケヤキの一枚板です。なかなか立派です。

この障子は少し修理していただけますけれどおしやれな空間です。

ガラス戸ですが、よくご覧になると、ゆがんで見えます。これ、当時のガラスです。このゆがみがなかなかいいのです。向こうに、白いものが建っていますけれど、戦時中は防空壕がありました。今から和室に入ります。先程は木造ですけど洋館です。こちらは和館なのです。こういう狭い部屋がいくつもあります。こ

の左側と前方が裏庭で、左前方のほうに防空壕がありました。当時、師団長宿舎時代はまかないの人も含めて12〜13人住んでおられたという記録があります。天井もこういうふうに高くて。

戦後は、豊橋の市街が焼けていましたからホテルもない、非常勤の先生が東京や京都から来るときに、ほとんどこれらの部屋に泊まられました。こういう部屋が6つ、7つぐらいあります。毎晩、多くの先生方がここで勉強サロンが広げられたのではないかな、と思うのです。この右手のところ、ここは京城帝大から来られた秋葉先生のお部屋です。文学部に来られたのですけれど。ただ、なかなか長生きしていただけなくて早く亡くなったのが非常に残念です。

戦時中、戦後、この近くの子どもたちが、ここでよく遊んだそうで、二部屋あったと言っていました。外側から見たさつききのステンドレスの窓枠のところ、ここが和館です。今、映っているあたりが小岩井先生の住んでおられたところです。正面の方向に愛大があります。

師団長時代全部で5人から7人ぐらいおられたのですけれど、そのうちの1人は井口省吾という陸軍大將になった人です。このあたりが和館で、この左側のこれは戦後増築されたと思われれます。正面に見えるビルは愛知大学の教職員住宅です。屋根に看板がありましたけれど、新幹線に乗っていると「愛知大

学」って書いてある看板が見えます。新幹線から見る人は、これが愛知大学かと思うかもしれないのですけれど。

山口さん、せっかくでするので、一言。

山口 こんなふうな企画があるなんて夢にも思っただけだったものから、ちよつとびつくりしています。今後とも、公館のこと、よろしく願います。本当にありがとうございます。公館のほうの支援もしていただきたいと思

中島 なぜ、公館に魅力を感じて。

山口 東亜同文書院大学記念センターとの関わりが、一番大きいですね。藤田佳久先生が申請しましたプロジェクト、文部科学省「私立大学学術研究高度化推進事業（オーブン・リサーチ・センター事業）」に、申請・実施・報告書の提出までお手伝いすることができました。なかでも、記念館・大学史展示室のリニューアルに関わり、公館との縁が生まれました。

1980年代以降、利用されなくなり、閉ざされていた公館に出向く機会がありました。その際、洋室等から関係資料を見つけ出すことができました。そしてその帰路のことです。赤煉瓦の美しい門からふと振り返ると、秋の夕日が公館の洋室の窓・三面の引き違い

の古いガラス窓に神々しく映え、輝いていました。私はこの美しい公館を描きたいという気持ちでいっぴいになりました。それまで仏像や人物を描きながらも絵のモチーフに悩んでいた私にとっては、この出会いが天の声でした。それから10年間、お昼休みや帰宅途中にせつせと通いました。そして、毎年、毎年、一作、一作、心を込めて描きました。公館と対面していくうちに、どうしてもこの歴史ある建物を再活用しなければもったいない、という気持ちが高まってきました。それは、この百年余りの間に公館に関わった人々の願いのような響きとを感じるからです。私は描き、作品を発表することしかできませんが、もう一度、この歴史ある公館を再活用していただきたいとの気持ちでいっぴいです。皆様、ご支援の程、よろしく願います。本日はありがとうございます。

田辺 今日、こういうかたちで皆さまに、感激いただいております。ありがとうございます。続きまして写真でまとめた動画ですけれども、愛大記念館の紹介ビデオもご覧ください。こちらも創立70周年記念事業の一つとして一昨日から大学記念館の改修が始まりました。2階の展示エリアを増やそうと思っております。

以上でございます。ありがとうございます。

表紙写真ご芳名

夏目増良 中島寛司

大滝則忠

有森茂生 小高圭治

倉持由美子 淀野敏男 藤田佳久

江暉 金森定夫 三好章

阿部純一 岡村幹吉 星博人

杉浦福夫 岩間毅

池田維

各務一徳 荒尾初雄 村上武

鈴木正也 平井誠二

村尾竹一 川井伸一

奥村進 栗田尚弥

阿部光 田本健一

中川義弘 山口恵里子 富増和彦

林一義

堀田幸裕 関谷賢三

森健一 田辺勝巳

村上武氏の急逝を悼む

愛知大学名誉教授・愛知大学東亜同
文書院大学記念センター・フェロー

藤田 佳久

悲しいお知らせです。本ニュース・第一八号は、昨年度の東亜同文書院記念基金会功労賞を受賞された村上武^{たける}氏の受賞記事満載のお祝い号でもあります。その村上武氏がそのあとの昨年末の十一月十六日に急逝されたという知らせが弟の忍様から伝えられ、関係者一同大変ショックを受けました。このことについては、本来ですと、次年度号のニュースになるところですが、本号の受賞記事にも関係する事なので、本号で皆様にもお伝えし、ここに哀悼の意を表させていただきます。

村上氏に近々にお会いしたのは平成二八年十月二九日、いつも出席される全生庵での荒尾精先生の墓参の時でした。本号にはその時のお顔が前列左にみえます。その前にも根津先生の墓参のあとの直会の時にお会いしたように思います。いずれの墓参のあとの帰路、ガンの治療をしていると何気ない顔でおっしゃられ、「エツ」と驚いて聞き返したことがありました。いつものようにお元気そうでしたので、事態の進行までには気遣いができませんでした。

そしてこの受賞式の時。いつもと変わらぬ様子で、体格も若き近衛篤磨や荒尾精を思わせるような堂々とした体躯でした。私の功労賞推薦の辞につづく村上武氏によるごあいさつの声は、いつものように響き、力強く荒尾先生を軸に、靖亜神社をめぐる経緯を、父上、兄上、地域の人々、吉田茂、中曾根康弘元総理などの政界や官界、そして岡崎喜平太氏など財界とのつながりの秘話、また、霞山会、滬友会、そして愛知大学など多様な分野の方々とのネットワークの形成をあらためて強く語られ、荒尾先生の靖亜の精神を愛知大学がぜひ継承してほしいとの心からの願いを吐露されました。

今、思いますと、ガン治療の中、ごあいさつというところで、今までのご自身の人生の時間の経過の中での熱い思いを一気に遺言として力をふりしぼって告げられたように思います。

村上氏は書院の卒業生会員ではなく、父上の徳太郎氏が書院の先生であり、苦勞されながらも靖亜神社を祀り、守られてこられたのを引継いだこともあり、準会員として書院生以上に書院生だったように思います。とくに日清戦争後の清国への賠償請求に日清間の協力発展のために反対した荒尾精先生の精神を敬い、その著作を復刻出版し、近年はその解説をつけて再び新たな復刻出版して注

目され、荒尾精神の現代性の価値を示されました。あわせて会誌「回光^{えいこう}」を配布し、荒尾精神をベースにして、日本の真の独立性の方向を啓蒙されるなど、精力的な活動を続けられてきました。

また、受賞のあいさつでも語られたように、戦前から戦時、そして戦後の書院、霞山会、滬友会、愛知大学の展開史を克明に語れる「生き証人」でもありました。急逝することがかかっていたら、もっと多くをお聞きし、色々記録に残していただくようお願いしておけばよかったです、惜しい方を亡くした、と後悔するばかりです。愛知大学東亜同文書院大学記念センターに対してもいつも御配慮いただき、貴重な先覚の遺品も御寄贈いただいたり、投稿もしていただきました。それらのいくつかは展示させていただいております。なお、私も七、八年前から荒尾精先生に取り組むべく少しずつ研究をすすめています。まだ成果は未知数ですが、何らかの成果を出すことで村上氏の恩に報いることが出来ればと願っています。

最後に、遅きに失した感がありますが、お亡くなりになる前に表彰させていただいたこと、先生にもお喜びいただけたこと、うれしく思っております。ご冥福をお祈りいたします。

ご挨拶

村上 忍

村上武（回光会・東光書院院長）は、平成29年11月16日21時33分にその夜の泊まり込み番の長男明徳に看取られて逝去いたしました。直ちに、故人の妻馨子、次男の莊慈、故人の弟の忍、厚が駆けつけて、故人への最後の挨拶を致しました。故人は、79年10ヶ月の生涯でした。

葬儀は、故人の意思により、家族葬として大覚堂にて身内だけで行わせていただいたことをご報告申し上げます。

故人は、昭和52年に父徳太郎を送り、昭和54年に6年間の闘病生活の母郁子に送った後あたりから、回光会・東光書院院長として、その運営に独自性を発揮したように思われます。

故人「村上武」について

村上武について、弟として若干述べさせていただきます。

最晩年の兄武は、樂しげで充実感に溢れた日々を送っていたように思います。癌を発症してからもそれは変わりませんでした。それまでに、父（村上徳太郎）、兄（村上馨）から引き継いだ難題、課題の道筋をつけて落書させた上で、村上武独自の境地を歩み始め

ようでした。本来の活動を樂しめていたようになつたのだと思います。

また、妻であり、同志でもあつた妻馨子さんの日常の買い物に付き合う姿、私も一緒に植木市に兄の運転で出かけた際に、その道順の選択でやり合う樂しげな姿を思い出します。兄の妻馨子さんに対する感謝の気持ちは並大抵のものではなかつたと思います。

後述します通り、父徳太郎は敗戦日本の咎（とが）一身に背負つてかのごとく、反省・懺悔の日々を自らに課し、日本の再建（精神的再建）に取り組みました。その際、家族の生活など一切顧みることではなく、むしろその活動に殉じること求めました。社会に反省・懺悔の日常を求めるわけですから、共感者が生まれると同時にここに多くの軋轢を産んだのも確かでした。あえて苦難の道を進んだのでした。釈尊、キリストを念頭に置いてです。

【父村上徳太郎の略歴】

村上徳太郎は、明治33年、佐賀県に生まれました。大正10年、上海・東亜同文書院卒業後、東亜同文書院助教授（東亜同文書院院長根津三洲先生の最晩年の弟子）、社会教育研究所などをへて、日華クラブ、また、「東光書院」を東京新橋に開設して、根津先生が説き続けられた、明明徳、親民、止於至善の「大学の道」を以つて天下を正すことを塾生の大学生たちに説いた。また会報『回光』を発行した。

新橋の「東光書院（塾）」は、戦災で焼失し、多くの塾生たちも戦地で戦死した。

戦前の東光書院の活動と戦後の再興された埼玉県東松山市の「大覚堂」及び「靖亜神社」を中心に置いた活動が違つたものとなつた。く別項で詳述するく 昭和52年1月12日死去

「著書」に『東西の対立を超えて』、『村上馨山文集』く全四巻くがある。

村上武は、長野県の上田松尾高校で一年間通い、一家の埼玉県東松山市への転居に伴い、川越高校の2年生に編入して同校を卒業し、大学は都立大学に進みました。

昭和35年大学卒業後九州佐賀県の杵島炭坑に職を得ました。しかし、そのサラリーマン生活も長くは続きませんでした。昭和37年に父の下で東光書院の運営をしていた兄（馨）が急性白血病で急逝したのを機に、東光書院の事業運営を手助けすることになったのです。東光書院に戻つてからは、財団法人日華学会の船橋寮で中国系留学生や日本人学生の世話をしつつ「回光」の発行など院主（父）の手助けをし、サラリーマンからの転身を図っていました。

昭和45年、靖亜神社の明德寮において東光書院院長と靖亜神社祭主という重職を任せられました。この頃から父徳太郎は身体の不調を感じ始めていました。心筋梗塞の発作を度々起こしていました。同時に極度に父の苦

悩が深まっていました。戦後からの東光書院の再建計画が余りのも未 completion だったので。武は、その状況下で東光書院の事業運営を任されたのです。事態が一層切迫したのは、母の脳血栓発症（昭和48年）と6年に渡る闘病が始まったのです。昭和52年1月12日に父が亡くなりました。その2年後の昭和54年2月に父のあとを逐って母もあの世に旅立ちました。

村上武の東光書院の事業運営の彼なりの革新は、この時から始まります。ここまで父と兄の事業運営の試行錯誤の繰り返しを冷静に見てきました。そして、問題の本質を見抜いていました。

武は、東光書院院長と靖亜神社祭主として「私は院主の残したものは総て負つていく決意を固めた」の宣言したのです。毎月「回光」の発行し続けること、「靖亜神社」の祭典を護り続けることを約束したのです。その中で「院主の残した負の遺産を解消していく」という考え方です。父徳太郎は、「回光」の中で世の中の社会の諸問題とそれらの実行者を厳しく糾弾し、結果的に多くの敵を作ってしまった。「靖亜神社」の祭典でも、東亜同文書院の同窓会「滬友会」の方々と軋轢もありました。兄武は「あらゆる因縁を良き因縁に変える」努力を続けることが自分自身の役割であるとしたのです。

そして、村上武は今日まで、院生の方々そして同文書院の同窓会「滬友会」の方々との

信頼関係の修復を第一に考え、努力して、それを果たしました。その間、「滬友会」の方々にとつても懸案であった「靖亜神社」の落ち着き先」を東亜同文書院が前身である愛知大学に祀っていただくことを交渉し、成し遂げたのです。

また、村上武は東亜同文書院の前身である日清貿易研究所を設立した荒尾精の研究者として『日清戦勝賠償異論』を失われた興亜の実践理念に解説をつけて出版しました。東光書院の戦後の「回光運動」の精神を荒尾精のこの論で明快に示したのです。「曰く…日本の近代化がそこから誤った「興亜主義」と「新略主義」との分岐点の選択を問う」です。愛知大学からは、2016年には【東亜同文書院記念基金功労賞】を受けました。

平成29年8月1日発行の「回光」が村上武の絶筆となりましたが、その掲載論の表題は「安倍・自民党に「日本国憲法」を弄らせてはならない」です。この「回光」は第901号となります（毎月発行したとして75年間となります）。

最後まで意気軒高でしたが、この号に限って（不定期発行）としています。余命を知らされた後、最後の気力を振り絞った意見書（警醒の論文）であるからです。同封しますのでお読みください。（「回光」の発行は、この901号を持って終わります）。

村上武には、4人の兄弟がいました。兄の馨（故人）、弟の安（故人）、弟の忍（元SN

Sムラカミ研究室主催）、弟の厚（SEAnews）在シンガポール（主催）です。今後は父村上徳太郎の志と村上武の志と思想を村上忍と村上厚が引き継いでまいります。

（中略）

武兄は、東光書院院長として、次のような「うた」を遺して逝きました。

武蔵野の土くれならん 我もまた 皇国日本の
民草なれば

持ち前の明るく、何事にも真摯に取り組む性格を発揮して、父から受け継いだあらゆる因縁を良い因縁に変えていきました。故人の最大の貢献であったと信じます。

故人は、平成28年に大腸にガンが見つかり、その切除手術を受けました。平成29年月肝臓への転移が確認され、埼玉がんセンターへ入院しましたが、程なく地元東松山市のシャローム病院（ターミナル・ケアのための施設）に移りました。その間も元気そのもので、亡くなる1週間前まではお見舞いいただいた友人の方たち、また家族と会話を楽しんでおりました。

ここに、皆さまからの故人への生前のご交誼に深く御礼申し上げます。
本当に、ありがとうございます。

平成29年11月19日

村上馨子・村上明德・村上莊慈

村上忍・村上厚

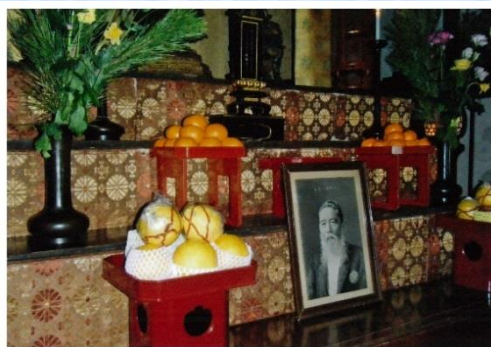
本間先生欽慕の会

平成28年5月7日(土) 東京小平霊園



- | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------|-------|-------|------|------|------|-----|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------------|
| 中島寛司 | 高井和伸 | 会田正彦 | 中川義弘 | 村尾竹一 | 戸田七支 | 南昌彦 | 有森茂生 | 荒尾初雄 | 各務一徳 | 山田晃司 | 田辺勝巳 | 高橋光子 | 本間万千子 | 岩間毅 | 殿岡晟子 | 写真お名前(敬称略) |
| | 伊藤登美夫 | 日笠羽司名 | 杉浦福夫 | 加茂傑 | | | 小崎昌業 | | | 藤田佳久 | 夏目益良 | | | 小川千尋 | | |
| 小川悟 | | | | | | | | | | | | | | | | |

小平霊園の墓前に、大学 書院 同窓 25 名が集い、法要が行われました。
 杉浦前副会長の司会進行により、村尾副会長の挨拶、本間家のご挨拶のあと各位の拝礼。続いて記念写真の撮影。一同による「般若心経」、小崎さん音頭による「院歌」。小川千尋さん音頭による逍遙歌「月影砕くる」を本間先生の面影を偲びながら高唱。
 殿岡さんからは、由緒ある佐渡の銘酒・北雪、年代物の紹興酒など心尽くしのおもてなし。帰りには、お土産に浅草今半のつくだ煮もいただきました。母校を思う情報は尽きることなく、お互いに学ぶこと多き一日でした。



根津山洲先生 梅花忌

平成28年2月18日(土) 京都月橋院



根津山洲先生墓参 桜花忌
平成28年4月2日(木) 横浜の鶴見総持

献花・焼香に同文書院の沿革を想い起こしながら、お隣の書院1期の水野梅暁氏の墓参も同様に致しました。鶴見・総持寺の桜も満開でした。花冷えもあってか、境内は静かでした。直会会場の予約時間の関係で、恒例の般若心経・院歌・寮歌・斉唱は無しにしました。

馴染みの蓬莱春飯店、ビールで乾杯、美味しい中華料理に杯も進み、話題は縦横に盛り上がり。

藤田先生からは、書院42期愛大1期の小崎さんの生い立ちから書院、現役その後を纏めたブックレット第9集の紹介がありました。短時間の情報に、学ぶこと多くでした。

参列者:(左から)平井誠二 小川悟 藤田佳久 奥村進 中島寛司 (小崎昌業)の6名(敬称略)



荒尾東方斎先生墓参
平成28年10月29日(土) 東京谷中の全生庵

定刻正午に荒尾先覚の墓前に参集し、献花、焼香、拝礼のあと村上さん先導による一同般若心経。関谷さんの音頭で、院歌、長江の水、桃李の吹雪の献歌。荒尾先覚の時代背景に、上海・書院時代の往時を重ね偲ばれたことと思います。

冒頭、藤田先生に「荒尾精の書院への思い、愛大へのメッセージ」と題して特別講義をお願いしました。藤田先生特有の調査資料を用意され、荒尾先覚の人材教育・実地教育を通し、日清提携をめざした先見の明に一同感激、多くを学びました。

村上さんから関連資料のご紹介、高遠さんのご挨拶、音頭による乾杯。ビールにお鮓、暫しの歓談。

参列者:(後ろ左から)森健一 松下信子 松下哲夫 杉浦福夫 小川悟 倉持由美子 斎藤眞苗 高井和伸

(前左から)村上武 熊谷範一郎 小崎昌業 高遠三郎 関谷賢三 藤田佳久 中島寛司 の15名(敬称略)

東亜同文書院大学記念センター活動レポート

①名古屋展示会・講演会を開催

愛知大学創立70周年記念事業として、「東亜同文書院の45年、愛知大学の70年」と称した愛知大学記念館所蔵コレクション展と講演会・上映会を8月24日から28日に「世界遺産ポンペイの壁画展」でにぎわう名古屋市博物館にて開催しました。

2006年横浜での開催から毎年実施している催しは、東京、弘前、福岡、神戸、シカゴ、京都、米沢、名古屋、富山、那覇、長崎、岐阜、広島、松本に続く16回目を数えます。展示会は過去最も大きな展示室を利用することができ、大学記念館所蔵のコレクションを「日本人著作コレクション」と「中国人著作コレクション」に分類して展示し、さらにこの70年間の愛知大学生のクラブ活動写真展コーナーも設け、愛知大学創立70周年を振り返るパネル等を展示しました。

名古屋市博物館の講堂には映画館のような大型スクリーン設備があったことから、8月27日には、「書院45年と愛大70年」の記念講演会・上映会を開催しました。

◆講演1. 「東亜同文書院から愛知大学へ」

藤田佳久氏（東亜同文書院大学記念センターフェロー・本学名誉教授）

◆講演2. 「『日中に懸ける』を超えて

―東亜同文書院、愛大が輩出したグローバル人材に学ぶ―
佐藤元彦氏（本学経済学部教授・本学前学長）

◆講演3. 「『東亜同文書院大学から愛知大学へ』展示会・講演会」

田辺勝巳氏（愛知大学豊橋研究支援課長）



講演1の前に、ドキュメンタリーの「東亜同文書院から愛知大学の歩み『21世紀にはばたく真の国際人の育成』をお見せし、映像アーカイヴズの「愛知大学記念館」「愛知大学公館」を、講演3の中で解説を加えて紹介しました。

展示会には約700名（8月24日から28日の期間）が訪れ、講演会には130名が参加されました。

なお、今回の展示会と講演会については、中日新聞と毎日新聞の記者が取材に訪れ、それぞれ紙面で紹介していただきました。

② 国際ワークショップを開催

愛知大学東亜同文書院大学記念センター・愛知大学国際問題研究所・中国社会科学院近代史研究所共催による国際ワークショップ「近代中国社会と日中関係」を、2016年9月9・10日、愛知大学名古屋キャンパスで開催しました。

このワークショップは、中国社会科学院近代史研究所の研究者と、愛知大学の近代中国史研究の研究者が協力して、近代中国史研究の研究組織（プラットフォーム）を作り、各自の専門領域を踏まえながら「近代中国社会と日中関係」について議論することを目的としたものです。

開会に際して、馬場毅（愛知大学名誉教授）、趙曉陽（中国社会科学院近代史研究所社会史研究室主任兼研究員）が挨拶しました。



第1セッション「東亜同文書院と日中関係」

高木秀和報告 中国における海産物供給構造の変容における日中関係について

野口武報告 東亜同文書院の1期生、2期生の日露戦争時及び以後の中国での就業履歴について

石田卓生報告 東亜同文書院の中国語教育の特色

佃隆一郎報告 戦後、愛知大学が創設された時期における東亜同文書院大学の位置づけ

第2セッション「中国近代社会と社会史」

羅煥秋報告 清初から清末までの漢学家が農村統治にあたって宗族をどう位置づけたかの言説

唐仕春報告 明清時代に於いて同郷の京師官僚の出した印結が官僚組織の運営で果たした役割について

王康報告

清代下層社会で多く見られた「嫁賣生妻」を婚姻関係との関連について

李長莉報告

小室信介が中仏(清仏)戦争中訪中し、その後、「中国崇拜」から「中国蔑視」へ転換した理由について

李俊領報告

清末、預備立憲改革以後、礼学館の設立からその撤廃までの経過

趙曉陽報告

ニュージールランドの中国人労働者へのキリスト教の布教の経過と、

呂文浩報告

その故郷広東省へのキリスト教の布教の経過について

社会学者陳達が1947年に発表した中国人口サンプル抽出調査計画の意義について

第3セッション「民国以後の中国社会と日中関係」

広中一成報告

水野梅曉旧蔵写真資料を通して、1920年代日中仏教徒の交流を

武井義和報告

1920年代上海における朝鮮人社会の形成と租界の法的構造との関係について

森久男報告

平綏路東段抗戦(チャハル作戦)を主要な考察対象として、日中戦争初期における蒋介石の作戦指導の特質

馬場毅報告

山東抗日根拠地における山東銀行幣を中心とした通貨政策について

三好章報告

清朝の冊封体制、近代の国民国家成立という歴史的視点から、中国の国際関係

セッションごとに討論が活

発に行われ、とりわけ第2セッションの総合討論は予定の50

分間を大幅に超過する1時間半にわたるものとなりました。

また、閉会后10日午後、中国

側の参加者は愛知大学記念館・

東亜同文書院大学記念センタ

ーを訪問されました。



③「愛知大学公館100年物語」講演会・展示会を開催

10月8日から10日にかけて、愛知大学主催で、豊橋市制110年を記念した豊橋市共催事業として「愛知大学公館100年物語」を開催しました。10月8日には豊橋キャンパス本館にて公館に関する講演会が、3日間を通して愛知大学公館の一般公開が行われました。

愛知大学豊橋キャンパスから程近い所にある愛知大学公館は、1912（明治45）年5月に陸軍第十五師団長官舎として建設され、今年で104年を迎えました。1917（大正6）年に師団長となった久邇宮邦彦（くのにのみやくによし）王の娘である良子（ながこ）女王（のちの昭和天皇皇后）もここで少女時代の一時期を過ごされました。1925（大正14）年に第十五師団が廃止された後は、陸軍教導学校・予備士官学校長の官舎などに使われましたが、1946（昭和21）年愛知大学創立後は、学長をはじめ教職員員の住宅として、その後は外来教員の宿舎として30数年前まで使用されてきました。洋館と和館を巧みに折衷した造りとなっている建物には、暖炉などが残っており、レトロな雰囲気は今に伝えていきます。



10月8日には講演会が開催されました。

◆講演1. 「愛大公館及び豊橋市の歴史」

藤田佳久氏（東亜同文書院大学記念センターフェロー・本学名誉教授）

◆講演2. 「公館の建造物としての特徴」

泉田英雄氏（建築歴史・修復学者）

両講演ともに図面や写真を用いて詳しく語られ、100名を超える来場者の方々の熱心に聞き入る姿が見られました。講演後は活発な質疑応答が行われるなど、大いに盛り上がりました。

愛大公館の一般公開は、築100年を記念して公開した2012年以来4年ぶりという事もあり、10月8日から10日の総来場者数は3日間で1,100名を超え、連日入場規制になるほど大盛況となりました。

趣向を凝らした和室と洋室が同居する和洋折衷の美しい建物である公館、そこにある暖炉、昔ながらのガラス、扉のつとての菊の紋の模様、など細部に至るまで見入る来場者の姿が見られました。今回は、和館すべてを公開でき、まさに築1世紀を公開することができました。

豊橋市制110周年記念事業「豊橋の偉人パネル展」、愛知大学公館絵画展も併催されました。



④ JRさわやかウオーキング(JR東海主催)が大学記念館にて開催されました

JR東海主催の「JRさわやかウオーキング」に、創立から70年を誇る愛知大学記念館を訪ねて」と題した新コースが設けられ、愛知大学がゴール地点となる歩行距離約10kmの約3時間コースが10月23日(日)に開催されました。

大学記念館が「JRさわやかウオーキング」コースの立ち寄りポイントになるのは、昨年に引き続き2回目で、今回は、コースの最終ポイントとなりました。参加者は総勢1,418名、うち大学記念館に901名が来館されました。『東亜同文書院の45年+愛知大学の70年』と『コッドレスク俳画展』(ルーミアニアコンスタンツァ・オヴィディウス大学准教授、俳画家)の特別展を同時開催し、常設展に加え、新たな展示、パネル等をお見せすることができました。国の登録有形文化財である、築108年の大学記念館に立ち寄られ、創立70年の歴史を誇る愛知大学を体感してもらえたことを嬉しく思います。今後とも地域に根ざし、地域に開かれた愛知大学記念館を目指していきます。



【ウオーキングコース】 創立から70年を誇る愛知大学記念館を訪ねて」
 豊橋駅→羽田八幡宮→湊神明社→吉田神社→豊橋公園(歩兵第18連隊基地跡)・吉田城(鉄櫓)→黒福公園→愛知大学記念館(旧陸軍第15師団司令部庁舎)→愛知大学前駅



⑤国際シンポジウム「東亜同文書院卒業生たちの軌跡を追う」を開催

国際シンポジウム「東亜同文書院卒業生たちの軌跡を追う」を2017年1月21日、愛知大学豊橋キャンパスで催しました。近在の方だけではなく関東や関西といった遠方からや、川井伸一学長、富増和彦副学長をはじめとする学校関係者など学内外80人あまりの参加者があり盛会となりました。

このシンポジウムは、文部科学省私立大学戦略的基盤形成支援事業「東亜同文書院を軸とした近代日中関係史の新たな構築」による5年間の活動の最後を飾るもので、また愛知大学創立70周年記念事業の一環として、一般財団法人霞山会の後援にて開催いたしました。

本センターが文部科学省私立大学戦略的基盤形成支援事業「東亜同文書院を軸とした近代日中関係史の新たな構築」によって進めてきたプロジェクト研究①近代的関係史の再検討、②大旅行調査からみる近代中国像、③書院の教育と中国研究システム、④書院から愛知大学への接合性、の多方面にわたる、研究活動を踏まえつつ、今回のシンポジウムでは東亜同文書院卒業生たちの軌跡



を明らかにすることにより、ビジネススクールとしての東亜同文書院の教育の成果を検証いたしました。

国際シンポジウム 文部科学省私立大学戦略的基盤形成支援事業
愛知大学創立70周年記念事業

東亜同文書院卒業生たちの軌跡を追う

日時：2017年 **1月21日(土)**
 13:00～
 場所：愛知大学豊橋校舎本館5階
 第3、4会議室

13:00～ 13:20	<あいさつ> 川井 伸一 (愛知大学学長) <趣旨説明> 藤田 佳久 (愛知大学名誉教授)
講演Ⅰ 13:20～ 14:00	ポール・シンクレア (カナダ・レジーナ大学准教授) 東亜同文書院による世界初のビジネス言語教育と現代アメリカのビジネス言語教育
講演Ⅱ 14:00～ 14:40	石田 卓生 (愛知大学東亜同文書院大学記念センター客員研究員、愛知大学非常勤講師) 日清貿易研究所・東亜同文書院の教育と卒業生の事例的研究 一高橋正二(研究所卒)・坂本義孝(書院1期)・大内隆雄(書院25期)一
講演Ⅲ 14:40～ 15:20	許 書苑 (台湾・中央研究院台湾史研究所研究員) 台湾出身東亜同文書院卒業生の軌跡
講演Ⅳ 15:30～ 16:10	藤田 佳久 (愛知大学東亜同文書院大学記念センターフェロー、愛知大学名誉教授) 東亜同文書院・同大学卒業生の軌跡と戦後日本の経済発展
講演Ⅴ 16:10～ 16:50	小川 梧 (表現技術研究所代表) 活躍する東亜同文書院の卒業生たち
講演Ⅵ 17:00～ 17:30	総合討論

愛知大学
AICHI UNIVERSITY

主催：愛知大学東亜同文書院大学記念センター
 後援：一般財団法人霞山会、愛知大学同窓会、
 公益財団法人愛知大学教育研究支援財団

お問い合わせ先

愛知大学東亜同文書院大学記念センター
 〒441-8522 愛知県豊橋市町畑町1-1
 TEL:0532-47-4139 FAX:0532-47-4196
 E-mail:toa@ml.aichi-u.ac.jp

1. カナダ・レジーナ大学のポール・シンクレア氏は、「東亜同文書院による世界初のビジネス言語教育と現代アメリカのビジネス言語教育」というテーマで発表し、書院が作成した中国語テキスト『華語萃編』は、教養主義をベースとしながらも、中国でのビジネス展開に必要な場面展開に応じた多様な内容であり、それを現代アメリカのビジネス言語教育との比較を行うという斬新な視点から報告を行いました。
2. 愛知大学東亜同文書院大学記念センター研究員石田卓生の「日清貿易研究所、東亜同文書院の教育と卒業生の事例的研究」は、高橋正二(研究所卒)、坂本義孝(書院1期)、大内隆雄(書院25期)の卒業後の中国だけでなくアメリカ、ヨーロッパにまたがる多様な活動を綿密な調査によって明らかにしつつ、彼らには良好な日中関係を希求する意識

が通底しており、それが東亜同文書院での教育の影響であると報告しました。

3. 台湾中央研究院台湾史研究所許雪姬女史「論東亜同文書院台湾学生
の人数：兼論陳新座、彭盛木、王庸緒三人不同的際遇」は、卒業後の3
人は日本、国民党、共産党の3つの勢力が争う複雑な状況の中で、ある
者は親日系、ある者は国民党系、ある者は共産党系の軌跡をたどったこ
とを明らかにしました。

4. 愛知大学名誉教授・東亜同文書院大学記念センターフェロー藤田佳
久「東亜同文書院・同大学卒業生の軌跡と戦後日本の経済発展」は、戦
後引揚げてきた東亜同文書院卒業生が、東亜同文書院で受けたビジネ
ス教育と調査旅行いわゆる「大旅行」というフィールドワークでの経験
や、上海という国際的環境の中で培われたコスモポリタンの精神によ
って、戦後日本の高度経済成長を最前線で支えたという仮説を、さまざ
まな事例から実証しました。

5. 愛知大学OB・表現技術研究所代小川悟氏「活躍する東亜同文書院大
学卒業生」は、『東亜同文書院大学史：創立八十周年記念誌』（滬友会、
1982年）をベースに、いかに多くの卒業生が経済界や社会で多面的
に活躍したのかということ、豊富な図表を用いて具体的にわかりやす
く紹介しました。



各報告に対して様々な質問が出され、さらに総合討
論でも川井伸一学長から質問が投げかけられるなど活
発な質疑応答が行われました。その後、日本寮歌祭で
活動する小川悟氏の指揮によって東亜同文書院寮歌
「長江の水」と旧制愛知大学寮歌「逍遙歌」が参加者
によって合唱され盛会の中に閉会しました。





愛知大学は1946年に中部地方において、初めての法文系大学として愛知県豊橋市に誕生しました。その前身は、第二次世界大戦前、海外にあった日本の高等教育機関であり、とりわけ中国の上海にあった東亜同文書院(のちに大学)が中心となりました。

東亜同文書院大学記念センターは、1993年に設立して以来、本学の「生みの親」ともいえる東亜同文書院大学の総合的研究と、書院を継承した愛知大学史の研究を進めており、その成果はシンポジウムや紀要、ブックレットにて発表してきました。

現在は、文部科学省の研究プロジェクト「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」の採択を受け、2012年から5年にわたり、5つの研究グループのもと研究を進めています。

研究活動のほか、センターがある大学記念館には本学の歴史などを紹介する展示室があり、見学者への案内・解説もしています。来館者数は年間4,000名を超え、本学学生のほか、高校生や国内外からの研究者など、広く来館いただいています。来館者の中には史資料を寄贈くださる方もおられ、整理・保存活動も行っています。

センター事業に賛同をいただだけ、東亜同文書院大学・愛知大学に関する資料等を提供いただける方は、当センターまでご連絡くださいますよう、お願いいたします。

大学記念館／東亜同文書院大学記念センター
連絡先 0532-471-4139

開館時間 10時～16時
休館日 月・日・祝日・大学が定める休日

国際シンポジウム

- 2016年 「東亜同文書院卒業生たちの軌跡を追う」
- 2015年 「近代日中関係史の中のアジア主義-東亜同文書院と東亜同文会-」
- 2014年 「東亜同文書院の中国研究-その現代的意味」
- 2013年 「近代日中関係史の中の東亜同文書院」
「孫文と東アジアの平和」
- 2012年 「近代台湾の経済社会変遷-日本とのかかわりをめぐって-」
- 2011年 「辛亥革命・孫文・東亜同文会」
- 2010年 「戦前外地にあった愛大ルーツ5校の出身学生が語るアジアと愛大」
- 2009年 「欧米研究者から見た東亜同文書院」
- 2008年 「東亜同文会の東アジアにおける教育活動とその展開」
- 2007年 「日中研究者による東亜同文書院研究」
「世界と日本の大学史の流れの中での東亜同文書院と愛知大学」

展示会・講演会

- | | |
|-----------|-----------|
| 2016年 名古屋 | 2010年 米沢 |
| 2015年 松本 | 2010年 京都 |
| 2014年 広島 | 2009年 神戸 |
| 2014年 岐阜 | 2009年 シカゴ |
| 2013年 長崎 | 2008年 福岡 |
| 2012年 沖縄 | 2008年 弘前 |
| 2011年 富山 | 2007年 東京 |
| 2010年 名古屋 | 2006年 横浜 |

出版物

- ・同文書院記念報 (vol.25まで発行)
- ・ブックレット (第9巻まで発行)
- ・愛知大学創成期の群像 など

スタッフ紹介



【左から】藤田センター職員、石田センター研究員、藤田名誉教授(センターフェロー)、田辺豊橋研究支援課長、伊藤センター職員、武井センター研究員



愛知大学東亜同文書院大学記念センター

愛知大学東亜 検索

